第57回全道造形教育研究大会釧路大会

■釧路大会研究テーマ

「できた！」「いいね！」の
喜びが息づく時間を求めて

■釧路大会研究主題

つくる喜び・感動する
心をつなげていく造形教育

会期：平成19年7月26日(木)
会場：釧路市立芦野小学校

北海道造形教育連盟
全道造形教育研究大会釧路大会実行委員会

第５７回全道造形教育研究大会釧路大会

平成19年7月26日(木)釧路市立芦野小学校

「できた！」「いいね！」の喜びが息づく時間を求めて

◆主　催　北海道造形教育連盟
全道造形教育研究大会釧路大会実行委員会

◆後　援　北海道教育委員会
釧路市教育委員会
釧路市私立幼稚園連合会
釧路市小中学校校長会
北海道高等学校長協会釧路支部
釧路市特別支援学級設置学校長協会

目　　次

挨　拶

○大会長（北海道造形教育連盟委員長）　今　　裕　子……3

○実行委員長（釧路大会実行委員長）　宝　輪　勝　己……4

祝　辞

○北海道教育庁釧路教育局　局　長　上　田　　充　様……5

○釧路市教育委員会　教育長　林　　正　昭　様……6

北海道造形教育研究大会釧路大会

○大会日程……7

○授業・提言一覧……8

研究の概要

○北海道造形教育連盟　研究部長　川　島　正　夫……13

○釧路造形教育研究会　研究部長　中　島　健　朗……15

公開授業・提言

○幼稚園・特別支援……23

○みる・かんじる……29

○かく・つくる……39

○かんがえる・くふうする……53

会場案内図……65

平成19年度　北海道造形教育連盟名簿……66

北海道地区サークル名簿……68

北海道造形教育連盟規約……71

全道造形教育研究大会の開催地と研究主題一覧……72

全道造形教育ネットワーク部会……74

釧路大会役員一覧……76

造形教育でつながる
ひと・ゆめ・こころ
＝くしろスタイルに夢を＝

北海道造形教育連盟委員長
今　　裕　子

造形教育でつなげていきたい人の輪・実践の輪

人間の生き方を求め，人間の心を育ててきた北海道造形教育連盟は毎年，実践研究の場を全道５ブロックの中で開催地を決定し実践の交流を行ってきました。第５７回目を迎える歴史のあるこの大会が釧路地区で行われ，釧路の風土に根ざした創意あふれる大会をご準備いただき感謝申し上げます。

教育を取り巻く情勢が大きく変化していく中にあり，人間の成長にとって「造形教育」が大切であり，みずみずしい感性を回復させ生きる力となることを造形連盟は各地区大会で実践し，交流し，確認しあい継承し続けてきました。今年も本大会でひとみ輝く子どもたち，そして連盟会員の皆様はもとより図工・美術に学びの価値を見出そうとする素晴らしい先生達，さらに地域の方々等多くの出会いに心がときめいてまいります。

研究主題「つくる喜び・感動する心をつなげていく造形教育」は子どもに寄り添い，現在の学校教育の中で実現可能なことを模索しながら題材の開発に試行錯誤し，日々の授業を何よりもよりどころとしております。図工・美術を専門とする教師のみならず，日々実践に悩み，解決への手立てを工夫され実践される全ての教師が本大会を通して共に学び合えることを願っております。

揺れ動く社会，新たな学習指導要領の動きを目前にし，その動向を見据え，現実の厳しい状況を乗り越え，造形教育は人間の成長にとってかけがいのない教科であることを釧路大会で引き続き主張していきたいと考えます。

「できた！」「いいね！」の喜びを共感

造形活動は子どもにとって夢膨らむ活動であり，それにかかわる私たち大人は子どもの夢づくり＝自分づくりを支援し，自らも夢をもって教育実践する人となりたいものです。

さて，「くしろスタイル」は幼児から小学生，中学生，そして高校生まで，生き生きとした表現活動の展開が期待されます。

さらに「特別支援教育」を分科会に位置づけＶＴＲによる授業検討を加えることにより，学校教育の中で「つくる喜び」「感動する心」が全ての子どもたちの成長にとって意義深いものであることをより一層確信できるのではないでしょうか。生活や遊びを中心に繰り広げられた幼児期からの「ゆめ」をつなぎ，「ゆたかさ」を幼児・児童・生徒の表現する活動の姿から感じ取っていただきたいと思います。造形活動による「あそぶ」「つくる」「みる」「たのしむ」「かんじる」など積極的に「くしろスタイル」に浸りつつ，「自分をつくりあげるスタイル」の確立をめざしながら楽しみましょう。

全道造形教育大会釧路大会に参加した皆様とともに「できた！」「いいね！」の喜びを子どもともに共有し，それぞれが生活の場とする地域や教室の中でその喜びが再び息づくことを信じたいものです。

子どもたちと喜びを共有したい

釧路大会実行委員長
宝 輪 勝 己

全道各地区から多数の造形教育に想いを持たれている皆様をお迎えし，第 57 回全道造形教育研究大会を開催できますことを感謝し，心から歓迎申し上げます。

本大会では，『「できた！」「いいね！」の喜びが息づく時間を求めて』を大会テーマに「つくる喜び・感動する心をつなげていく造形教育」を研究主題として，子どもたちと指導する教師の関わり合いの中で育まれる造形教育の実践に取り組んでまいりました。

「できた」と笑顔で喜ぶ子どもと「いいね」と共感し合う子どもたちと教師。この関わりのなかでつながる心を大切にしていきたいと考えております。

特に本大会で，全校種の授業を数多くみていただきたいという思いから幼稚園，高等学校にお願いし，幼・小・中・高あわせて 11 本の授業を公開できることになりました。

授業者のなかには，図工が苦手という教師もおりますし，具体的な実践の手だてでもまだ課題があるところもあると思いますが，どうぞ皆様の率直なご意見をいただくなかで，互いに高め合う場にしていただければ幸いです。

授業者のある先生が，「私はもともと図工が好きではありませんでした。そして教師になってもどの様に指導してよいかわかりませんでした。でも，このごろ，子どもたちとの授業のなかで，この子の絵はいいな，この子の工作の作品もいいな，と思えるようになりました。」と，話してくれました。

この先生は，子どもたちの想いに添って喜びを共有することができるようになったのでしょう。もしかすると一人，そして一人と子どもと共に喜びを共有できる教師を育てることが，私たちの務めになるのでしょうか。

時数の削減や専門教師の減少など私たちを取り巻く環境は大変厳しくなってきております。また，予見できないほど，激しく変わる情報化，少子化社会のなかで心を病み，人間関係の希薄化からいじめ，不登校に悩む子どもたちも増えてきております。

そのなかで，子どもたちの想いを受けとめ，表現する喜びを実感できる造形教育こそ未来に夢や希望を抱く子どもたちを育てる源となることを改めて確信したいと思います。

最後になりますが北海道教育庁釧路教育局，釧路市教育委員会はじめ各関係機関，多数の皆様方のご理解とご協力を賜りましたことを深く感謝申し上げます。

そして，ご参会の皆様にとりまして実り多い大会になりますように祈念し，ご挨拶とさせていただきます。

第５７回全道造形教育研究大会釧路大会の成果に期待して

北海道教育庁釧路教育局長
上　田　　充

第５７回全道造形教育研究大会が，全道各地から，造形教育に情熱を傾けておられる多くの先生方をお迎えし，雄大な自然に囲まれ，豊かな文化が薫るここ釧路の地で開催されますことは，誠に喜ばしく，心からお祝い申し上げます。

北海道造形教育連盟におかれましては，発足以来，幼児児童生徒の豊かな人格形成を担う造形教育の推進のため，美術作品展や研究大会を開催するなど，実践的な研究を着実に積み重ねてこられ，本道の造形教育の充実に多大な御尽力をいただいておりますことに厚くお礼申し上げます。

さて，今日，学校教育においては，「確かな学力」や「豊かな心」などの「生きる力」の育成を目指し，学校や地域の実態に応じた創意ある教育活動を展開し，その取組について保護者や地域の方々に説明責任を果たすことが求められております。

とりわけ，「豊かな心」は，「生きる力」の中核となるものであり，各教科等の目標を踏まえつつ，学校の全教育活動を通して，その育成を図る必要があります。

そのため，各学校における図画工作科・美術科においては，児童生徒一人一人が，表現及び鑑賞の活動を通して，自らの思いや願いをふくらませ，つくりだす喜びを味わうようにするとともに，造形的な創造活動の基礎的な能力を育て，豊かな情操をはぐくむことが重要です。

このような中，本研究大会が，前年度の札幌大会の成果を受け継ぎ，「『できた！』『いいね！』の喜びが息づく時間を求めて」の大会テーマのもと，「つくる喜び・感動する心をつなげていく造形教育」を研究主題に掲げ，幼稚園から高等学校までの造形活動の充実を目指す試みは，誠に意義深い取組であります。

特に，「つくる喜び」と「感動する心」に焦点を当て，児童生徒が，自己の思いや願いを大切にしながら，「もの」や「こと」との出会いや「人」との対話を通して，自分のよさや作品の美しさなどを実感していくことは、造形活動に対する学ぶ意欲を高め，豊かな感性や創造性をはぐくむ学習活動であり，本研究大会の成果に大きな期待を寄せるところであります。

この釧路大会の成果が，全道各地に広がり，本道の造形教育が一層，発展する契機となりますことを御期待申し上げます。

終わりに，本研究会の開催に当たり御尽力いただきました皆様方に心から敬意を表しますとともに，北海道造形教育連盟のますますの御発展並びに御参会の皆様方の御健勝，御活躍を祈念申し上げ，お祝いの言葉といたします。

豊かな人間性を育む造形教育を

釧路市教育委員会　教育長
林　正昭

この度，第 57 回全道造形教育研究大会釧路大会が，全道各地から多数の関係者をお迎えして当市で開催されますことは誠に喜ばしく，心からお祝いとご歓迎を申し上げます。

北海道造形教育連盟におかれましては，これまで数々の優れた研究実践に取り組まれ，常に本道の造形教育の充実・発展のために先導的かつ中心的な役割を果たしてこられました。その功績に対しまして，深甚なる敬意を表します。

変化の激しい現代社会を生きる上で，知性と感性の両面で調和のとれた人間性を培うことは，これからの教育において一層必要とされております。

また，美術を愛好する心情と美に対する感性を育て，一人一人の児童生徒に豊かな情操を養っていくことを目標とする造形教育の役割は，ますます大きなものになってきております。

とりわけ，造形活動を通じて自らの形や色，表し方などをつくりだす喜びは，子どもたちの成長にとって極めて大切なものであります。それは，表現の欲求を満たしながら，持てる力を主体的・創造的に働かせ，よさや美しさ，楽しさを味わい，夢を描くような豊かな心を育てるとともに心身の調和的な発達を促すことになります。

さらに，造形教育を通して育まれた感性は，他の教科・領域においても，豊かな知的好奇心や興味・関心を伴った深い追求・理解などへと発展していくものと考えます。

今回の釧路大会では，研究主題に「つくる喜び・感動する心をつなげていく造形教育」をかかげ，「みる・かんじる」「かく・つくる」「かんがえる・くふうする」という学習活動を通して，子どもたちに「できた！」という喜びを味わわせ，「いいね！」という感動する声や息づかいのある授業を構築していくことは，まさしく時宜を得た研究であると考えます。

ぜひ，本研究大会を契機に，日常の授業の中で，子ども達一人一人がこのような気持ちを体験し，人間形成に深く寄与する素晴らしい造形教育が展開されますことを，心からご期待申し上げます。

結びに，会員の皆様が，今後とも一層の研鑽に励まれ，豊かな人間性を育む造形教育の実践に邁進されますとともに，貴連盟がますます発展されますことをご祈念申し上げ，お祝いの言葉といたします。

《釧路大会シンボルマーク》

デザイン：釧路市立美原中学校　山中香於理さん（3年）

「釧路のイメージは湿原と夕日と丹頂なのでそれを合体させました。丹頂は折り紙の鶴にしてみました。」

文字デザイン：釧路北陽高校　磯田奈央さん（2年）

大　会　日　程

第57回　全道造形教育研究大会釧路大会

1．研究主題

大会主題（北海道造形教育連盟研究主題）

出会いと対話から自己創造感が生まれる造形教育

釧路大会研究テーマ

「できた！」「いいね！」の喜びが息づく時間を求めて

釧路大会研究主題

つくる喜び・感動する心をつなげていく造形教育

2．日　　程

平成１９年７月２６日（木）

○受付・公開授業・開会式・全体会・授業検討１・授業検討２・課題別分科会／ネットワーク会議

○レセプション・閉会式（釧路プリンスホテル）

8：30　9：00　10：40　11：40　12：30　13：30　14：30　16：00　18：00　20：00

受付	授業公開		開会式 全体会	授業検討１	昼食	授業検討２		課題別分科会 ネットワーク部会	移動	レセプション 閉会式

・公開授業は開始時刻を変えておりますので，複数の導入部分を参観ください。

授業タイムスケジュール

9:00　9:10　9:15　9:20　9:30　9:40　10:30　10:40　11:30

公　開　授　業

階段式授業公開

9:00　幼稚園　年長
「ダイナミックに○○！」（80分）
授業者　北村香里　金行宏江　《1F　東側学年棟》

9:15　幼稚園　年長
「世界に一つだけのおみこしを作って遊ぼう」（50分）
授業者　上村　晴奈　丸山　明佳利　《1F　西側学年棟》

9:00　小学校1年　【みる・かんじる】
「ならべてならべて」（60分）
授業者　岩口　玉季　《1F　西側学年棟》

9:10　小学校2年　【かく・つくる】
「みてみておはなし」（60分）
授業者　佐藤　幸　《1F　東側学年棟》

9:20　小学校6年　【かく・つくる】
「自然からの贈り物」（60分）
授業者　国井　彩子　《2F　図工室》

9:00　小学校4年　【かんがえる・くふうする】
「コロコロコロガラート」（80分）
授業者　佐藤　円　《2F　東側学年棟》

9:30　小学校6年　【かんがえる・くふうする】
「ものくろあーと」（60分）
授業者　亀岡　朗子　《2F　西側学年棟》

9:30　中学校3年　【みる・かんじる】
「日本の仏像彫刻のよさ・西洋彫刻のよさ」（50分）
授業者　杉山　浩彰　《3F　東側学年棟》

9:00　中学校1年【かんがえる・くふうする】
「イメージの箱」（50分）
授業者　免田　まゆみ　《3F西側学年棟》

9:40　高校選択　【かく・つくる】
「切り絵アート」（50分）
授業者　竹本　万亀　《3F　東側学年棟》

9:15　中学校2年　【かく・つくる】
「抽象彫刻」（50分）
授業者　更科　結希　《3F　西側学年棟》

開会式（体育館）

授業検討・課題別分科会タイムスケジュール

11:40　12:30　13:30　14:20　14:30　16:00

授業検討１	昼食	授業検討２		課題別分科会

幼　稚　園
「年長　ダイナミックに〇〇」
「年長　世界に一つだけのおみこしを作って遊ぼう」
《１Ｆ　東側学年棟》

特別支援（ＶＴＲ）
授業検討
《１Ｆ　理科室》

小学校：みる・かんじる
「１年　ならべてならべて」
《１Ｆ　音楽室》

小学校：かく・つくる
「２年　みてみておはなし」
「６年　自然からのおくりもの」
《２Ｆ　西側学年棟》

小学校：かんがえる・くふうする
「４年　コロコロコロガラート」
「６年　ものくろあーと」
《２Ｆ　東側学年棟》

中学校･高校：みる・かんじる
「２年　日本の仏像彫刻のよさ･西洋彫刻のよさ」
《３Ｆ　東側学年棟》

中学校･高校：かく・つくる
「２年　抽象彫刻」
「選択　切り絵アート」
《３Ｆ　東側学年棟》

中学校･高校：かんがえる・くふうする
「１年　イメージの箱」
《３Ｆ　西側学年棟》

【特別支援】
提　言
「障がいのある子ども達と美術教育」
篠　木　麻　希
《１Ｆ　理科室》

【みる・かんじる】
提　言
「子ども達がお互いの作品を見て，そのよさを感じる手立てとしての問いかけ」
日　野　道　子

「美術館における
対話型鑑賞教育モデルの開発」
花　輪　大　輔
《１Ｆ　音楽室》

【かく・つくる】
提　言
「ドライポイント～超現実的な世界
（シュルレアリスムの世界）」
木　田　る　み　子

「絵本の制作」
上　田　秀　実
《１Ｆ　体育館》

【かんがえる・くふうする】
提　言
『「魅力的な題材」から
「魅力的でかんがえる活動」へ』
岩　崎　愛　彦

「超現実絵巻」
森　川　沙　織
《２Ｆ　東側学年棟》

【ネットワーク部会】
《２Ｆ　視聴覚室》

授業検討分科会【①11:40～12:30・②13:30～14:20】

学校・分科会		題材名・学年		授業者
幼稚園		ダイナミックに○○！ (育てた野菜の葉を使って)	【年長】	北村香里・金行宏江 (大楽毛よしの幼稚園)
		世界に一つだけのおみこしを作って遊ぼう	【年長】	上村晴奈・丸山明佳利 (愛国フレンド幼稚園)
特別支援		遠矢小・富原小での実践事例をVTR紹介 篠木麻希 (釧路町立富原小学校)		
小学校	みる・かんじる	ならべてならべて (水彩絵の具の色水づくり)	【1年】	岩口玉季 (釧路市立鳥取小学校)
	かく・つくる	みてみておはなし ～ふしぎなたまご～	【2年】	佐藤幸 (釧路市立芦野小学校)
		自然からのおくりもの ～思いを寄せ合って～	【6年】	国井彩子 (釧路市立美原小学校)
	かんがえる・くふうする	コロコロコロガラート	【4年】	佐藤円 (釧路市立芦野小学校)
		ものくろあーと ～水墨画に挑戦～	【6年】	亀岡朗子 (教育大附属釧路小学校)
中学校・高校	みる・かんじる	日本の仏像彫刻のよさ ・西洋彫刻のよさ	【3年】	杉山浩彰 (釧路市立美原中学校)
	かく・つくる	抽象彫刻をつくる	【2年】	更科結希 (釧路町立遠矢中学校)
		模様でつくる切り絵の制作	【2年選択】	竹本万亀 (釧路星園高等学校)
	かんがえる・くふうする	イメージの箱	【1年】	免田まゆみ (釧路市立鳥取西中学校)

		助言者	司会・運営者	記録者
幼稚園		三枝佑嘉 (美原つくし幼稚園長)	大嶋春香 (釧路かすみ幼稚園)	石川洋子・佐藤由美子 (美原つくし幼稚園)
特別支援		竹本千鶴 (釧路養護学校)	宮沢清美 (釧路市立桜が丘小学校)	八木沼みちる (釧路養護学校)
小学校	みる・かんじる	内山博之 (弟子屈町立昭栄小学校)	伊藤恵理 (釧路市立新陽小学校)	福原知子 (釧路市立芦野小学校)
	かく・つくる	小野三枝子 (釧路市立山花小中学校)	里見勝之 (釧路市立昭和小学校)	氏絵美 (釧路市立大楽毛小学校)
	かんがえる・くふうする	森川浩 (釧路市立美原小学校)	加藤和江 (釧路町立遠矢小学校)	市野真貴子 (釧路市立芦野小学校)
中学校・高校	みる・かんじる	浪木弘志 (釧路武修館中学校講師)	長谷川成佳 (釧路市立景雲中学校)	大木敬子 (釧路市立青陵中学校)
	かく・つくる	奥田泰朗 (釧路市立共栄小学校)	田越智保 (釧路市立鳥取中学校)	西村琴美 (釧路市立春採中学校)
	かんがえる・くふうする	森富輝 (釧路市立大楽毛中学校)	阿部孝彦 (釧路町立富原小学校)	小泉昭子 (釧路市立幣舞中学校)

課題別検討分科会【14:30～16:00】

テーマ別分科会	提言者	助言者	司会・運営者	記録者
特別支援	篠木麻希（釧路町立富原小学校）	竹本千鶴（釧路養護学校）	宮沢清美（釧路市立桜が丘小学校）	八木沼みちる（釧路養護学校）
みる・かんじる	日野道子（浜中町立貫人小学校） 花輪大輔（教育大学附属釧路中学校）	桑田正博《石狩》（江別市立角山小中学校） 内山博之（弟子屈町立昭栄小学校）	長谷川成佳（釧路市立景雲中学校）	氏絵美（釧路市立大楽毛小学校）
かく・つくる	木田るみ子（釧路町立富原中学校） 上野秀実（釧路東高等学校）	引地俊夫《道北》（上富良野町立東中小学校） 小野三枝子（釧路市立山花小中学校）	田越智保（釧路市立鳥取中学校）	川島周子（釧路市立芦野小学校）
かんがえる・くふうする	岩崎愛彦（千歳市立千歳小学校） 森川沙織（釧路市立大楽毛中学校）	森寛祐里《札幌》（札幌市立三角山小学校） 森富輝（釧路市立大楽毛中学校）	加藤和江（釧路町立遠矢小学校）	阿部孝彦（釧路町立富原小学校）

開会式

	司会	釧路大会副実行委員長	森　富輝
1.	挨拶	北海道造形教育連盟委員長	今　裕子
		釧路大会実行委員長	宝輪勝己
2.	祝辞	北海道教育庁釧路教育局長	上田　充 様
		釧路市教育委員会教育長	林　正昭 様
3.	研究概要説明	北海道造形教育連盟研究部長	川島正夫
		釧路大会研究部長	中島健朗

研究概要

研究概要

［北海道造形教育連盟研究主題］

『出会いと対話から自己創造感が生まれる造形教育』

釧路大会　2007.7.26　　北海道造形連盟研究部長　川　島　正　夫

Ⅰ．造形教育における人づくりを起点とした大会として

第５６回全道造形教育研究大会／札幌大会、終了後の大会収録に、次のようなことを述べさせていただきました。

大会を終えて一番に感じることは、幼稚園から高等学校までを網羅した本連盟の大会の価値の素晴らしさです。今後は、大学教育や特別支援教育などとも連携することにより、「人の発達と造形教育のあり方」～造形教育における人づくり～に、より深く踏み込んでいきたいと考えています。また、他教科や社会（地域）、人や文化などとのつながりを広げていくことで造形教育の価値や意義をより強く発信していきたいと考えています。

釧路大会の企画書見て、この方向性を受けてくださっていることに力強さを感じました。また、今回の大会は、幼稚園から高校までの授業公開が企画されています。全校種にわたって授業公開を実現するまでの釧路造形連盟のご尽力に敬意を表します。

さて、今回の大会は、

【大会開催の背景】

＜釧路地方の現状＞　専門教師の激減、「何をどう教えてよいか分からない」教師の切実な声

＜目の前の子どもたち＞　もっと**「できた」**と自己実現の喜び、**「いいね」**と共感し合う喜びを

【だからこそ】

「つくる喜び」、「感動する心」をつなげていく造形教育を！

【そのために】

一貫した系統性もったカリキュラム「くしろスタイル」を！

と考えられます。

この釧路の考え方は、北造連研究部の考える、心躍る「もの」や「こと」、「ひと」との**出会い**、造形的なやりとりや**対話**を通して自己実現や**自己創造感**につながるものと考えられます。「できた」や「いいね」が、子どもの数だけ生まれ、新しい意味や価値を見つけ出す、新しい自分に気付くという人づくりに向かうものと考えたいと思います。そして、造形教育でめざすべき調和のとれた人間形成につながるものであってほしいと強く願います。

そのためには、春の地区委員総会でも述べました「習得」、「活用」、「探究」という視点の中の**「活用」**の部分を中心に子どもの姿に学んでいきたいと思います。そこには、一人一人のよさの発揮から**「できた！」**や、**「いいね！」**という感受や共感が生まれると思います。子供が自らのよさをいかに活用し、思いの実現に向かうかを学んでいきたいと思います。

また、特別支援学級の実践紹介が、造形教育の「ひらかれた姿」の表れの一つとして提案されることを期待しております。

「くしろスタイル」という９年間にわたるカリキュラムの提案が、造形教育に携わる多くの方々に自身と方向性を与えてくれることを期待しています。

Ⅱ．連盟の今までの財産を受け継いだ大会として

今回の釧路大会は、連盟のこれまで積み重ねてきた財産を生かして開催されることに心強さを感じます。具体的には以下の点が上げられます。

□幼稚園から高校までの授業公開　→　造形教育における人づくりの提案
□特別支援教育のＶＴＲ公開　→　ひらかれた造形教育のあり方の提案
□階段式授業公開　→　限られた時間でより多くの授業参観が可能に
□校種別分科会、課題別分科会の設定　→　子どもの発達、これからの造形教育のあり方について学ぶ場として

Ⅲ．最後に

釧路の方々が、道研究部の基本的な考えを受けて、それを実際の授業として具現化していただける期待感を強くもちました。

今回の大会は、子どもが実際の造形活動を通して＜もの＞や＜ひと＞と相互にかかわり合う（**対話する**）ことから「新しい価値」に向かう姿が見られるもの、となることでしょう。

釧路大会のご成功を心よりお祈り申し上げます。また、釧路の実践に学ばせていただけることをとても楽しみにしています。

【北海道造形教育研究主題】

『出会いと対話から自己創造感が生まれる造形教育』

北海道造形教育連盟　札幌大会　　２００６．７．２６～２７
◆造形教育を「ひらき」、「すくすく育て」、「つくるの大好き！」な子どもを
◆『楽しさあふれ、確かな表現を実感する造形教育』
◎「北海道の子どもの現状を捉えるためのアンケート」を起点にした研究大会
◎「３つの扉」から造形教育の価値や可能性の発信
～「造形のＷＡ」による題材観、ＰＭＦとのコラボレーション
文部科学省等へ陳情書送付

北海道造形教育連盟　釧路大会　　２００７．７．２６
◆「できた！」「いいね！」の喜びが息づく時間を求めて
◆『つくる喜び・感動する心をつなげていく造形教育』
◎「くしろスタイル」による小学校から中学校までのカリキュラムの提案
◎幼稚園から高校、特別支援学級を含めた授業公開から図工・美術のあり方の提案

豊かな人間づくりをもとにして、造形教育の価値や可能性の発信

2008年 函館・北広島大会へ

大会テーマ　「できた！」「いいね！」の喜びが息づく時間を求めて

研究主題　つくる喜び・感動する心をつなげていく造形教育

中島　健朗

「できた！」「いいね！」の喜びが息づく時間

テレビ画面で活躍するヒーローと全く同じ形をしたフィギュア、まるで現実であるかのように夢の世界をあらわす CG など、子ども達を取り巻く環境は、簡単に「夢の世界」を手にすることができる「物質的な豊かさ」にあふれている。

このような環境の中でも、子ども達は、白い紙に、様々な色を使って「好きなもの」を描き、折ったりちぎったりして色々な形をつくる。色々な大きさの箱を組み合わせてロボットをつくったりもする。つまり、子ども達にとって、自分自身の手で「思いつくままに」つくることは、楽しいことなのである。そして、夢中になって取り組んだ後、「できた！」と大満足の笑顔を見せる。そこで、周囲の友達などから「いいね！」「素敵だね！」という声がかかると、その笑顔がもっと輝くのである。

自分の「思い」や「願い」が形になり、それが認められる時、子ども達は喜びを感じ、この経験を繰り返していくことが満足感や達成感という「精神的な豊かさ」につながっていく。

このような時間と経験を積み重ねていくことが、子ども達を取り巻く「物質的な豊かさ」と子ども達に内在する「精神的な豊かさ」のバランスを整え、心豊かな子ども達を育んでいくのではないだろうか。

大会テーマ「できた！」「いいね！」の喜びが息づく時間を求めて

図工・美術の時間は、学校生活の中で自分の「思い」や「願い」を形にする喜び、それを他者から認められるという喜びを直接体験することができる数少ない時間のひとつである。

それ故に私たちは多くの子ども達が「できた！」「いいね！」という声を上げたり、思いを持ったりすることができる題材や活動を考え、求め、蓄積していかなければならない。

このような考えから、私たちは、第５７回全道造形教育研究会・釧路大会の大会テーマを〔「できた！」「いいね！」の喜びが息づく時間を求めて〕と設定した。

つくる喜び・感動する心をつなげていくためには

子ども達は「美しさ」に出会うことで心を動かされる。その「感動」を原動力として自分自身で何かをつくり出し「つくる喜び」を味わう。

そして、何かをつくりたいという欲求から夢中になって取り組み、「つくる喜び」を味わい、自分自身の満足感や達成感と共に他からの評価に新たな「感動」をおぼえる。

学習指導要領では「自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題解決する資質や能力」や「何に価値を見いだし、どのように生きるか」を大切に活動を進めていくことが必要だと述べている。

図１　呼吸のモデル

呼吸のように循環する「つくる喜び」と「感動する心」

これらは、図工・美術の活動の中で、子ども達が「美しさ」に出会い、それに直接かかわっていくことで繰り返される五感と心の動きによって育まれていく。つまり、「つくる喜び」と「感動する心」は、まるで呼吸のように無意識に循環しながら、子ども達の中で高まっていくものなのである。（図１参照）

そして、私たちは、この循環を一過性のものでなく、すべての子ども達が、幼児期から青年期まで続く造形教育の中で経験できるように、また、そのつながりを一層深めたり、強めたりするには何が必要かを求めていきたいと考えた。

研究主題
つくる喜び・感動する心をつなげていく造形教育

そこで、平成１８年度から本研究会の研究主題を「つくる喜び・感動する心をつなげていく造形教育」と設定し、授業実践、研究交流会、実技研修会などを通して研究を続けてきた。

その過程で、前述の呼吸のように循環する「つくる喜び」と「感動する心」の流れを一層円滑にさせるためには、指導内容の精選と充実並びに一人一人の子どもの考えや心の動きの「みとり」の充実が必要だということがわかった。つまり、他教科でも求められている「指導と評価の一体化」を、一題材から学年の計画、そして図工・美術が必修教科である義務教育のカリキュラムまで広げて考える必要性を感じた。そこで、「指導と評価の一体化」を以下のような視点をもって研究を進めていきたいと考えている。

視点Ⅰ：「くしろスタイル」

幼稚園から小学校、中学校、高校に至るそれぞれの成長段階で、子ども達が活動する内容には必ず意味が存在する。

図工・美術を取り巻く現状は

しかし、図工・美術では、他教科と比較して「教師が何をすべきか」が教師の裁量に任される部分が大きく、指導内容が曖昧になる場合が多い。

また、釧路地方の図工・美術を取り巻く現状を鑑みたとき、中学校では、釧路市内だけでなく周辺地域において、図工・美術の専門教師が激減していること。小学校教員からは「なにをどう教えて良いのかわからない。」や「自分が苦手だから教えられない。」等の切実な声を

「くしろスタイル」とは

開く機会が少なくないという現状がある。

このような現状を解決するために、図工・美術の学習を進める上での基本的な考え方や指導内容を具体的に提示していく必要があると考えた。

そこで、私たちは授業実践を中心に、それらを明確にしていく作業を続けてきた。そして、これを基に図工・美術が必修である小学校～中学校９年間の基本的なカリキュラムを作成した。それが「くしろスタイル」であり、左に示す図２が、その一例である。

ここには①９年間の単元配当②各題材の題材名及び学習目標、主な学習活動の内容、４観点の評価規準を明記した。

このように、小学校１年生から中学校３年生までの９年間でどんな素材や技法、道具などをどのような順番で提示し、学年を追うごとにどのように深めていくか、そして、教師は何を指導しなければならないのか明確にすることで、図工、美術の活動に一貫した系統性を持たせることができると考えている。

【第6学年 【造形と作品】
D学級

題材名及び題材				
よく見てみると（10時間） 身のまわりにあるものを不思議な見え方をするものに気づき、その面白さを楽しんだり、なぜ不思議な見え方をするのかを考える。 トローリがやってきた（4時間） つくりたいものに合わせて、使わない工シャツや紙下などを組めるための骨などの材料を集め、骨を段ボール紙に ひたしたり、色を塗ったり、厚紙、ダンボールなど他の材料と組み合わせながらつくりたいかたちをつくることができる。				
主な学習活動	評価規準			
	関心・意欲・態度	発想・構想の能力	創造的な技能	鑑賞
独自者の作品などを見て、その面白さ・少なな不思議に感えるのかを発表し合う。 不思議な見え方をするものを探したり、つくった題材を楽しし合う （10時間）	B材料を見なおし、その作品的ものを楽しんでいる。 A材料を見なおし、作品の面白さやどのように工夫しているのかなどを楽しんでいる。 【観察・発言】			B材料者の作品のおもしろさや自分で発見したことを話し合う。 A材料者の作品のおもしろさや不思議さを考え、自分なりの見方や、自分が表現するなるどんなようにするかを話し合う。 【観察・発言・ふりかえり】
つくりたいものに合わせて、使わないTシャツや紙下などを組めるための骨などの材料を集める。（6時間） 骨を段ボールにひたしたり、色を塗ったり、厚紙、ダンボールなど他の材料と組み合わせながらつくりたいかたちをつくる。 （3時間）	B段ボール紙の形態を楽しみ、それに使うことで表現する作品がもしろさを感じ、そこから表すものを楽しんで考える。 A段ボール紙の形態を楽しみ、それに使うことで表現する作品がもしろさを感じ、そこから表すものを楽しんで考える。 【観察・発言・作品】	B段ボール紙とや等を組合しながら発想したものをどのようにつくったり著れしたりして表すかを考える。 A段ボール紙や等から見想したものを、はさみ具やその他の素材、技法を生かしてどのように表現するかを考える。 【観察・発言・作品】	B段ボール紙の弾性を生かして、組み立て方や著れを工夫している。 A段ボール紙の弾性を生かして形をつくり、身近素材や他の異なる組み合わせながら工夫して表現することができる。 【観察・発言・作品】	
できた作品を相互に見い合い、良いところを話し合う。（1時間）				B自分の作品を紹介したり、友だちの作品のよさを評価したりしている。 A作品の中にどの段ボール紙がどのように生かされているかを見つけ話し合う。 【観察・発言・ふりかえり】

図２：くしろスタイル（５年生）

くしろスタイルを使用した学習では

また、「くしろスタイル」を制作する過程や現在も継続している検証の過程では、共通の題材を複数の教師が複数の学校・学級で実施し、実践を交流することができるため、題材の研究を共同で行えるメリットがあることがわかっている。

「くしろスタイル」を基本に、教師が子ども達に「どんな素材を与え、どんな支援をし、どんな感動を与えるか」を考えていく事が授業づくりの大切なポイントになる。それを基本に、子けることになり、「つくる喜び」と「感動する心」をつなげていくと考えている。

本研究会では

本研究会では、このような「くしろスタイル」を基本とした研究授業と授業実践を基にした提言を中心に展開していきたい。

視点Ⅱ：学習活動を勧めていくための３つのポイント

評価規準の四つの観点

「くしろスタイル」では、各題材の評価規準を、それぞれの活動であらわれる子ども達の姿を基本に、関心・意欲・態度、発想、構想の能力、創造的な技能、鑑賞の４観点に設定している。これらは、図工・美術の学力としてとらえることのできる子ども達の学習活動の重点であり、教師が指導し、支援していくための重要なポイントである。

３つのポイント

私たちはこの中から、**発想、構想の能力、創造的な技能、鑑賞**の３**観点**を各活動時間の学習の重点として考えている。以下がその概要である。

○発想・構想の能力～「かんがえる・くふうする」

題材をもとに「思い」や「願い」を表現するとき、子ども達は、どうやって表そうかと「かんがえる」。そして、素材や表現方法を選び、実際に活動しながら、よりよい表現のために「くふうする」。これは一回きりのことではなく、活動のはじめから終わりまで、子どもの内面で繰り返し行われている。それを教師がみとり、支援していくことで、それらはより深まり、子ども達の表現は高まっていく。

○創造的な技能～「かく・つくる」

子ども達の思いや願いなどの心の動きやイメージの広がりなど**心の学力＝みえない学力**を**作品や活動＝みえる学力**として表出させることに大きな影響を及ぼすものの一つが「創造的な技能＝かく・つくる」力である。それを伸ばしていくためには、教師が題材や素材などに対する道具の使い方、表現技法を正しく理解し、段階的で継続的な指導をすることが必要になる。

○鑑賞～「みる・かんじる」

みることとつくることが循環する中で「かんじるこころ」が育まれ、それによってイメージ化されたものが有形化されていく。つまり、美の価値と出会う第一歩が「みる」ことであり、美術は見ることから始まり、見てかんじ、見て知るということになる。

また、心理的、感情的、精神的などの自己の内面的な心を「かんじる」と考えている。

これらは図工・美術の学習活動の中では普遍のものである。しかし、実際の子ども達の活動内容や教師の支援を考えた場合、各活動時間において軽重があらわれる。私たちは実践を通して、どの段階でどのポイントに最も重点を置くかを明確にし、子ども達が学ぶべきポイント及び教師が重点的に支援する内容を、一時間に一つの観点として設定した。

これをふまえて学習活動を進めることで、「子ども達がその時間でやるべき事」と「教師が重点的にみとり、評価し、支援する事」を具体化することができた。

関心・意欲・態度は

関心・意欲・態度に関しては、①各活動時間ごとに変化をみとることができる。②上記のポイントを教師が支援していくことで子ども達の満足感や達成感を充たし、活動に対する意欲さらに高めていくことができる。という２点から、ほぼ全ての段階に設定している。

本研究会では、それぞれのポイントを重点化した公開授業の中で、「何をすべきか」を明確に意識して活動を行う子どもの姿やそれをみとり支援に生かしていく教師の姿をご覧いただきたいと考えている。

視点Ⅲでは、子ども達の活動から、これら３つのポイントをどのようにみとり、支援に生かしていくかを述べていきたい。

視点Ⅲ：ポイントをみとり、支援していくためには…

活動の中の子ども達の心の変化

子ども達が、活動の中で浮かべる様々な表情。素材や題材に出会い、「どんなふうにしようかな」とワクワクしながら自分の活動やつくりたいものを考える姿。うまくいったところに満足し、次も同じくできるよう確認する姿。失敗したところをよく観察して、次はうまくいくように注意して活動する姿。自分の表現しやすい素材や道具を発見する姿。これは、活動における「ふりかえり」の姿であり、そこには「つくる喜び」と「感動する心」のサイクルが潜んでいる。この「ふりかえり」によって、子ども達は自分なりに実感したり、納得したりし、それを生かしながら主体的に表現していくのである。

「つくる喜び」と「感動する心」が潜む「ふりかえり」

素晴らしい「ふりかえり」を生かしていくためには

しかし、子ども達の活動の様子を観察していると、活動の最中にアイディアが浮かんだ時には、すぐに実行することができるが、何日かおいた次の活動まで持続させることは難しいようである。また、一単位の活動時間の終了時に「今度はこうするんだ！」と思いついたことを記録しないために忘れてしまう等、活動の中からあらわれる素晴らしい「ふりかえり」を活動に十分生かすことができていない現状があった。

私たちも、観察や対話、活動や作品を見ることなどで「ふりかえり」を把握しようとしてきたが、全ての子ども達の思いを含む一挙手一投足を把握することは不可能である。

そこで、「ふりかえり」を子ども達と教師がお互いに把握し理解することができ、次の活動に生かしていく方法の一つとして、ワークシートやポートフォリオの活用を選択した。以下は、小学校と中学校における活用の方法である。

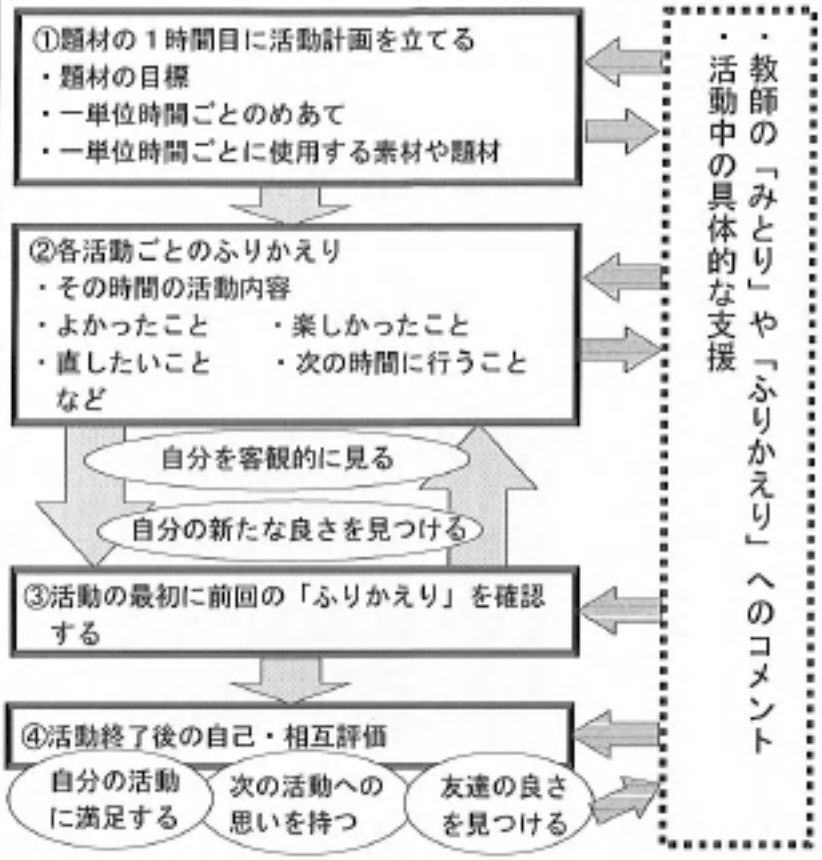
小学校では

小学校では、児童の「ふりかえり」を学習カードやワークシートを用いて記録している。低学年から高学年にかけて、ワークシートの形を変化させながら、繰り返し行うことで、児童は自己評価の視点を持ち、その精度を高めていくことができ、教師は、活動の中でみとることができなかった事を把握することができた。そこには、完成した作品からは直接見ることの出来ない「かんがえる・くふうする」姿「みる・かんじる」姿などが存在していた。

以下は、学習カードやワークシートを用いた児童の「ふりかえり」

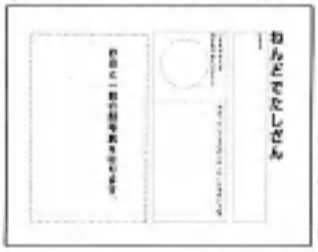
と教師の「みとり」の図である。

図３：ワークシートを用いた「ふりかえり」と「みとり」



このように展開される学習活動の中で使用するワークシートと学習カードの具体例を以下で紹介する。

①低学年の「ふりかえりカード」



小学校低学年の児童については、短時間で一つの題材を行うことが多く、また、ワークシートへの文章による記述は難しいため、にっこりマークなどに○をつけることや☆マークに色を塗る等、自分の満足度を表現できるカードを用いている。また、簡単な言葉で「わかったこと」「楽しかったこと」「またやってみたいこと」等を書き入れる欄を設ける場合もある。

②写真を用いてふりかえる「展示用カード」

長い時間をかけて描く絵画活動では、一単位時間ごとに画面の状態が変化していく。そこで、活動が終了するごとにデジカメを用いて作品を撮影し、児童の活動の変化を記録しておく。その写真は「ふりかえり」の際に使用したり、完成と作品と比較したりすることで、児童は、自分の活動の深まりを具体的に確認することができる。さらに相互評価の際にも友達のがんばりを作品の変容から感じることができる。

③中学年のワークシート

中学年では、それぞれの活動のワークシートに「ふりかえり」を左図のような形で記録している。その日の活動の様子や感じたことを文字によって記録することで、次回の活動やそれに使用する素材や道具を確認することができ、その日に感じたことを次回の活動に確実に生かしていくことが、児童の活動をより主体的にしていく。左は、その一例である。

これは３年生のワークシートであるが、各活動時間のふりかえりの欄には、低学年で使用したカードと同様に☆に色を塗って満足度を表現する方法を残している。

④高学年のワークシート

高学年では、活動後のふりかえりに加えて、活動の導入段階での目的や意図や、素材や道具に関しても簡単な計画を立て左図のように記録している。ここで紹介しているものは６年生の卒業制作で使用するものであるが、展示する環境や作品を鑑賞する他学年にも配慮した制作を意識できるようにしている。

中学校では

中学校では、生徒をみとる具体的な手立てのひとつとしてポートフォリオの活用を考えている。その理由の一つは、生徒の活動の過程を言葉や数値として記録に残すのは難しいということにある。以下はそこで使用するワークシートの一例である

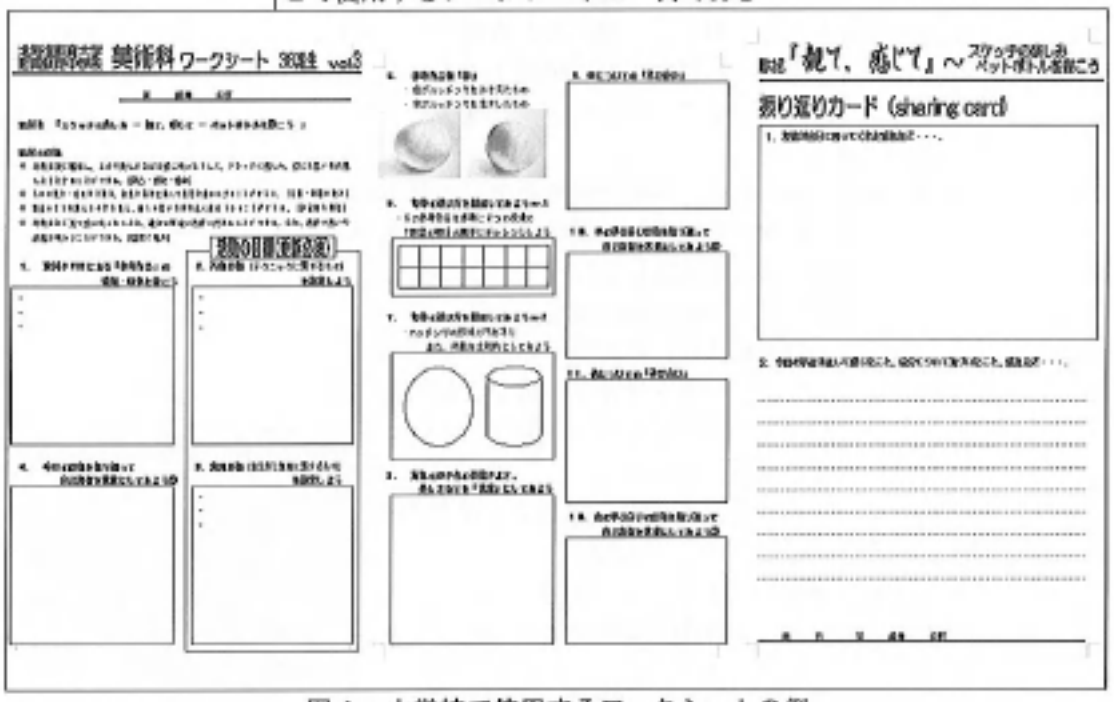


図４：中学校で使用するワークシートの例

ワークシートを使ったポートフォリオの活用

ポートフォリオを活用することで、生徒自身が活動の過程における多様な思考の流れを多面的に情報化し、継続的にフィードバックすることによって、「次に何をすべきか」「どうするべきか」という課題意識を持つことができる。さらに、活動の過程では無意識に行っていて自覚できなかったことにも気づくことができる。そして、今後の活動への見通しを持つことが、関心・意欲・態度をさらに高めていくことにつながると考えている。

ワークシートを用いた生徒は

生徒はワークシートに題材の目標を設定した後、活動の最中や自己評価場面、相互評価場面での仲間との交流の中で、技能に関わる「行動目標」や自分のイメージの拡張や表現の追求に関わる「表現目標」を継続的に設定していく。こうすることで、自分が活動計画のどの場面にいるのかを確認するとともに、課題意識を自覚し、解決への見通しを持つことができると考えている。

これは、生徒一人一人が活動の中で、自然に「つくる喜び」と「感動する心」をつないでいることを表している。

ポートフォリオを用いた教師は

教師がポートフォリオを確認することによって、活動場面では見落としてしまう生徒の細かな意識や目標設定や流れを把握することができ、次への支援の構想に生かすことができる。また、ポートフォリオ評価を取り入れることで、生徒の実態を細かく把握することができ、評価に反映させることができる。

「指導と評価の一体化」を深めるために

以上のように、小中９年間で発達段階に応じた「ふりかえり」と「ポートフォリオ」を継続的に行っていくことで「指導と評価の一体化」をより深めていくことができると考えている。

これは、図工・美術の活動を、子ども達だけでなく、私たち教師にとっても楽しく、充実した時間にし、さらには、その中で生み出される「つくる喜び」と「感動する心」を一人一人のものから教室全体へ広げていくことになる。

今後の「くしろスタイル」

私たちは、学習を進める上での基本的な考え方や指導内容、評価の方法などを整理し、補足するなど、実践の中で「くしろスタイル」の加筆修正を継続して行っている。そして、「くしろスタイル」が学習を進める上での基本的な考え方として定着していくことを望んでいる。

将来的には、各地域、学校、学級で「くしろスタイル」を下敷きにした「○○スタイル」が構築され、その地域や子ども達の特性にあった図工・美術の学習が展開していくことを期待している。

そして、このような図工・美術の活動の中で、子ども達が「できた！」と喜び、「いいね！」と感動する声や息づかいを生み出す造形教育を求めていきたい。

公開授業提言

幼稚園・特別支援

9:00　　10：20

幼稚園　年長

「ダイナミックに〇〇！」(80 分)

授業者　北村　香里・金行　宏江

《　1F　東側学年棟　》

9:15　　10:05

幼稚園　年長

「世界に一つだけのおみこしを作って遊ぼう」(50 分)

授業者　上村　晴奈・丸山　明佳利

《　1F　西側学年棟　》

指導案【かんがえる・くふうする】　　学校法人香木学園　大楽毛よしの幼稚園
年長　男児２２名　女児２１名　計４３名

「ダイナミックに　〇〇〇！」

指導者　北村　香里
金行　宏江

１　子どもの実態（大会テーマとの関連から）

年長という立場に喜びや期待を持つ子どもたち。私たち保育者は立腰（*腰骨を立てる*）教育を軸とし、「年長児としてどんなことができるか？」を日々話し合っている。子ども達の中からは「小さな子に優しくしたい！」「自分のことは自分でする！」など、年長児として自覚ある言葉が聞こえ、それを日々の保育の中で繰り返し促していくことにより、同年・年下の友達のお世話をしてあげようとする姿やみんなのお手本になろうとする姿が行動となってみられるようになってきた。保育者に認め誉められたり、仲間からも「すごいね！」と認められたり、「ありがとう」と感謝されたりする体験から一人ひとりが“自信”という芽をぐんぐん伸ばし始め、目の輝きも増してきている。

制作活動全般においては、「何かな？」「どうするのかな？」「やってみたいな！」と意欲的に取り組む姿が見られる。「どうすればいいのかな？」「こうしてみようかな？」と保育者が思いも付かない発想で、折り紙を使った模様づくりやのりを使った貼り作業、クレヨンや絵の具を使った色塗りなどを楽しんでいる。活動の途中に、自分の思い通りにならない部分が出てくると保育者を頼ってくることもあるが、ヒントを与えることで、より一層発展した作品をつくろうと楽しむ姿も見られる。完成後は、「できた！」「先生！見てください！」と自分の完成作品に喜びや満足感を味わっているようである。

１学期は、年長という自覚を育てる中で、制作活動面においても自己満足感を多く持つ姿が見られた。今後は、「〇〇さん上手だね！」と友だちの作品の良さをも認めあえる気持ちを持たせ、「友だちと一緒にやってみたい！」と協力し合える活動の場を設定し、「またやりたい！」「みんなですると楽しい！」と思える一人ひとりの自発性、創造性をさらに豊かなものにし、友だちとの関わりの中で創意工夫を生かせる活動の充実を図っていきたい。

２　題材について

体験農園ハウスでの種蒔きの様子

少なからず野菜嫌いが叫ばれている今日、本園では自ら種を蒔き、育てて収穫し、調理して食べる体験を年間を通して行っている。この活動の中で、市販されている野菜は食べられないが、幼稚園の体験農園ハウス・畑で自分たちが育てて収穫した野菜なら食べられるという子もいる。

本題材では、美味しくいただける野菜はみんなに喜ばれるが、捨てられてしまう葉を何かにヘンシンさせて野菜同様みんなを喜ばせたいとの願いを生かしていきたいと考えている。つまり、題材はこの写真の種まきの瞬間から始まっている。

園周辺を散歩したある日のこと「先生！あれなあに？」と子どもが木を指さした。「あれは、ネコヤナギですよ。」と保育者が答えると「ふわふわしていておもしろそうだね。」との声。本園は、自然の環境にも大変恵まれており、毎日のように出かける散歩の度に、このような会話が生まれる。そして、子ども達は自然の葉っぱ、つる、木ぎれ、石などを見つけ、まるで宝物を見つけたかのように大切に園まで運んでくる。

そこで、本題材では、散歩の途中で見つける宝物のような自然物も用いて、体験農園ハウス・畑で収

穫される野菜の葉が一体どんな物にヘンシンできるのかを考え**〈①考える〉**、今まで使用したことがある道具（はさみ・糊・テープ、絵の具、クレヨン、折り紙…）に加え、新しく仲間入りした道具（ボンド・モール・割り箸…）の中からつくりたい物に合う道具を選び使う活動**〈②工夫する〉**、子どもの持つ創造性を生かすことができるように保育者が基本を伝え、その中でダイナミック**（③力強く・生き生きとした）**に自分流の作品を作ることができた喜びを味わわせてあげたい。

3　題材の目標

・自然とふれ合い、作物の成長や収穫を喜びを味わいながら、それを用いて楽しんで活動できるようにする。
（造形への意欲、関心、態度）

・素材の形や色、栽培や散歩の経験からどんなものができるかを考え、表現できるようにする。
（かんがえる・くふうする～発想・構想の能力）

・野菜の葉や自然物の特徴、道具の使い方を知り、つくったり遊んだりできるようにする。
（かく・つくる～創造的な技能）

・できた作品を紹介し、素敵なところをみんなで認め合うことができるようにする。
（みる・かんじる～鑑賞の能力）

1　題材の流れ（本時　１５・１６時間目／４０時間程度）

児童・生徒の活動の様子	教師のかかわり・指導のポイント
４・５月 「体験農園ハウスで種蒔きをしよう」 「畑にいもを植えよう」「水やりをしよう」 「大内公園へ春探しに出かけよう」 「野の花・落ち葉遊びを楽しもう」 ～〈型どり・フロッタージュ よもぎ蒸しパン〉～ 「看板を作ろう」～〈折り紙〉～ （年少組「赤カブ・サラダ大根収穫」 ～〈酢の物・押し葉〉～）	＊作物を栽培する体験を通して、お世話するこことや小さな命をいただいて生きてゆけることに感謝する大切な心を育てる。 ＊土や木などの自然物に触れ、季節の移り変わりに気づかせていく。 ＊春探しの中で見つけた自然の宝物を用いた遊び（ヘンシン術）を伝え、体験させていく。 ＊身近な材料（折り紙）を使ったヘンシン術そして、その集合隊でできる作品があることを伝えていく。 ＊仲間意識を深められるよう、協同作業に取り組ませる。
６・７月 「葉をかたどってヘンシン」 ～〈アクリル絵の具で色塗り〉～ 「つなげてみよう」 ～〈モール・穴開けパンチ・千枚通し〉～ 「飾ろう」	本時 「ヘンシンさせよう」 「ダイナミックな○○ができたね」
＊年少児が収穫した野菜の中で捨てられてしまう葉を何かにヘンシンさせられないか考えさせてみる。 ＊自分で使いこなせる道具を用意する。 ＊様々な材料を用いてヘンシン術の腕に磨きをかけていく。	８・９月 「ごっこ遊び」 「お客様に楽しんでもらおう。」 ＊皆で協力し合う活動を大切にし、充実感達成感を味わわせる。 ＊お客様に感動を伝えていく。

指導案【かんがえる・くふうする】　　学校法人釧路学園　愛国フレンドようちえん
年長　さくら１組　男児１２名　女児８名　計２０名
さくら２組　男児１１名　女児８名　計１９名

「世界に一つだけのおみこしを作って遊ぼう！！」

指導者　上村　晴奈
丸山　明佳利

１　子どもの実態（大会テーマとの関連から）

私たちの園では、ピアノの音に合わせて体を動かすリズム遊び活動や、教材を使って自分で考える力を身につけるSIあそび活動、絵本を使っての漢字教育を行う言葉あそびなど、様々な活動を通しての教育を行っている。

さくら１・２組の子ども達は、年長になって３ヶ月でも、園の中で一番お兄さんお姉さんだという自覚が芽生え、小さいお友達のお部屋に行ってお世話をしたり、活動に取り組む姿勢も小さいお友達のお手本となるような素敵な姿勢になってきている。　運動会に向けての練習では、年長はたくさんの種目があり、覚えることもたくさんあったにもかかわらず、「今日は何の練習だろう？」と毎回意欲的に練習に励んできた。中には仲間と協力し、一つとなって行う種目もあり、みんなで力を合わせて行うんだという団結力も少しずつ生まれてきている。

制作活動においては、「何を作るのかな？」とどんなことにも興味を持ち、「やってみたいな！」という気持ちで意欲的に取り組む姿が見られ、同じ題材でも、一人ひとりの味が作品に表れ、同じものだけど同じではない一人ひとりの個性が光る作品を作りあげている。つくり方がわからなくなったときは、席の近い友達同士教えあったり、どうしても困ってしまった時は保育者のところまで聞きに来るなどして、最後まで諦めずに自分の力で作品を作り上げようという気持ちで活動に取り組んでいる。完成したときは、達成感に満ちており、自分で作ったんだという喜びを感じている様子が見られる。

今回は、運動会で育まれた団結力と絆を生かし、一人ひとりの発想を取り入れ、「こういうのもいいね！」「こうしたらもっとかっこいいね！」など創意工夫しながら、みんなで協力し合あって活動に取り組む姿を期待したい。そしてその中で、みんなで一つのものを作り上げるということがこんなにも楽しいんだという気持ちと出来上がったときの感動を存分に味わわせたいと考えている。

２　題材について

７月は夏祭りの季節。お祭りといえば、おみこし。しかし、お祭りの時におみこしを見たり担いだりする経験も少なくなってきており、「お祭り＝おみこし」という意識は薄い。そこで、日本に昔から伝わる伝統的で大切なものを、もっと子ども達に身近に感じてもらいたいと考え「おみこし」を共同製作する
題材を選んだ。

「おみこし作り」を通じて、子ども達にはみんなで一緒に作る楽しさ、１つ目標（おみこし作り）に向かって協力する喜びや楽しさ・嬉しさを味わってもらいたいと考えている。また、一人ひとりの個性を活かし、本来の「おみこし」の形にとらわれずに、子ども達がかんがえたオリジナルおみこしを作り上げる創造性などを体験させたい。

本題材では、活動のはじめに、基本的な作り方や使い方を保育者が伝え その後は①１つの物をみんなでどのように完成させるかを考える（**かんがえる**）、②今まで見たこと、使ったことのある様々な素材（段ボール・キラキラモール・紙テープ・ビニール袋・ビニールテープ・色画用紙・折り紙など）を工夫して（**くふうする**）、どのようにオリジナルのおみこしを作りあげるか、③普段使っている道具（ハサミ、のり、セロハンテープ、両面テープなど）を素材に合わせてに使うことが出来るか（**つくる**）を中心に、子ども達の発想と思いつきを大切にして活動させたいと考えている。そして、オリジナルおみこしを子ども達が笑顔いっぱいで元気に担ぐ姿を期待している。

3　題材の目標

・季節を感じ、みんなで一緒に考えたり、作ったりする楽しさを味わながら、活動に取り組めるようにする。

（造形への意欲、関心、態度）

・様々な材料や道具を使って、どんな飾り付けができるを考え、表現できるようにする。

（かんがえる・くふうする～発想・構想の力）

・材料の素質や道具の使い方を知り、作ったり遊んだりできるようにする。

（かく・つくる～創造的な技能）

・作品ができた時の達成感をみんなで味わい、喜びや嬉しさを共感し合えるようにする。

（みる・かんじる～鑑賞の能力）

4　本時の展開

1.　今日の活動内容について知る。 ○すでに出来ている「おみこし」の土台を見て、どんな風に飾るかをイメージする。 ・かっこいいのがいいな。　・キラキラしたものにしよう。 ・たくさん飾りつけしよう。　・こうしたらいいかな？ 2．様々な材料の素材、道具の使い方を知る。 ○材料を目で見たり、手で触ったりしてどんな素材かを知り、どのように活用できるかを考える。 ○鋏や糊、セロハンテープなどの道具の使い道を考える。 3．　制作を開始する。 ・３つのグループごとに「オリジナルおみこし」を制作する。 ○土台が出来ている「おみこし」に様々な材料や道具を使って飾りつけをする。 ・クレヨンで絵を描く。　・折り紙を貼り付ける。 ・様々な材料を糊やテープなどで貼り付ける。など… 4．出来上がった「オリジナルおみこし」を各グループごとに見せ合う。 ・ここがかっこいいね。　・色がきれいだね。 5．出来上がった「おみこし」を使って遊ぶ。 ○体育館に移動し、グループごとに分かれ、おみこしリレーをして遊ぶ。 ・チーム対抗戦で行う。 ・ルールをしっかりと理解する。（三角コーンのまわりをまわって元の場所に戻り、次のお友達と交代する。） 6．教室に戻り、今日の活動を振り返る。	○事前に用意した、飾りのついていない「おみこし」を子ども達に見せ、今日の制作内容を伝える。 ・子ども達の発言を拾いながら、イメージを膨らませていくよう促す。 ○それぞれの材料を子ども達に掲示し、各グループごとに材料を配る。 ○道具を使う時の注意事項を伝える ◎自分達の思ったままに飾りつけを楽しめるよう声かけする。 ・同じ場所ばかりに飾りつけが集中しないように、まだ飾りつけがされていない場所を気づかせる。 ・子ども達の制作の様子を見ながら「かっこいいね」「きれいだね」など声かけをする。 ○各グループの「おみこし」を見て、感じたことを伝え合う。 ○リレーを行うにあたって、ルールやおみこしの持ち方などを確認してから始める。 ○今日の楽しかったこと、頑張ったことを振り返り、一日のまとめを行う。

提言「特別支援教育　　釧路町立富原小学校

『障害のある子ども達と美術教育』

提言者・篠木　麻希

1．特別支援教育と美術教育

周知のように、特別支援学校や特別支援学級には、障害の種類や程度、学習能力などにおいて様々な子ども達が在籍しています。また今年度からは特別支援教育が本格的に施行され、通常学級に在籍する LD（学習障害）や ADHD（注意欠陥多動性障害）、PDD（広汎性発達障害）などの障害を持つ子ども達に対しても、支援を講ずる旨が示されました。

美術教育においても、それらの子ども達一人一人に合わせて授業を作っていくことが重要になってきているのですが、個々に発達段階が違うこと、身体的な特徴により通常の道具が使えないことなど、日々の教材作りで様々な工夫が必要になってきています。

国語や算数・数学などでは文字の読み書きができる、計算ができる、思考力を伸ばすといった目標がはっきりと提示できます。また音楽や体育などでは、リズムが合わせられる、跳び箱がとべるなど、客観的に判断できる目標や評価基準・規準を設定することが可能です。

しかし図工や美術について見てみると、「正解が一つではない」、「個性を重視しなければならない」、「のびのびやらせればよい」、「教えてはいけない」などの声が多く聞かれます。そしてそのことが、「何を教えてよいのか分からない」、「何を作らせてよいのか分からない」、「作品をどう評価したら良いのか分からない」といった問題に繋がっているようです。

ましてや障害を持つ子ども達に対しては、通常の指導方法では学習内容が理解できなかったり、作品が仕上がらなかったりすることがままあります。通常学級の子ども達以上に、個々の子どもに合わせて指導方法を変えることや、道具を工夫すること等をかんがえていく必夫する必要があるのです。

2．釧路造形研究会での取り組み

前述までのことを受け、釧路造形研究会では、「個々の子ども達の能力を引き出す美術教育」として、様々な研究を行ってきました。

一つ目は「現状を把握すること」です。対象の子どもの発達年齢や、障害の状況、造形活動に対する態度などを把握することによってその子どもの関心や課題などを見つけることができます。

二つ目は「個々に達成させたい目標を決めること」です。その子どもの現状に応じて目標を決定することで、この単元（時間）で何を頑張らせたいのかが明確になります。

三つ目は現状、達成目標を踏まえて、「配慮事項を考えること」です。ここでは課題提示の仕方、道具の工夫、教師が手を貸す場面などの設定が挙げられます。

以上のことは、例えば通常学級での授業や複数の障害のある子ども達と同じ題材に取り組む時にも有効です。同じ題材を扱いながら、個々が達成させたい目標に対しては子ども自身に頑張らせ、配慮事項に関しては、支援を行う。そうすることで、評価のポイントもはっきりしてきますし、教師が手を加えすぎると言った懸念も解消されると考えています。

何よりも、子ども達が物を作る、見る、触れる喜びや達成感を味わうことを通して、自分もできるのだという自信をつけ、その子どもの持っている諸能力を伸長してくことができるのではないでしょうか。

みる・かんじる

9:00　　10:00

小学校1年

「ならべてならべて」(60 分)

授業者　岩口　玉季

《1F　西側学年棟》

9:30　　10:20

中学校3年

「日本の仏像彫刻のよさ・西洋彫刻のよさ」(50 分)

授業者　杉山　浩彰

《3F　東側学年棟》

基調提案

みる・かんじる

美術は呼吸する
・(in) と (ex)

小泉博一（2001）は、「人間の呼吸というのは、エクスパイアすると自然にインスパイアせざるをえない」と述べている。「息を吸ったり（in）はいたり（ex）すること＝呼吸」は、人間が生きていく上で必要不可欠である。

美術教育の立場でそれを考えた場合、表現を『Expression「（思想・感情などの言語・絵画などによる）表現」』として捉えるならば、それの対を成すものを『Impression「（感覚的）印象、感じ」』と考えることができるだろう。つまり、外界の刺激をあらゆる感覚器官、または心的な経験を通して、自己の内部に取り入れること（in）と、心理的、感情的、精神的などの自己の意内面を、外面的、感性的に客観化して表す表現（ex）が循環する、まさに「呼吸」の関係に例えることができると考える。

「みる」
・心理的な契機

それでは人は外界の刺激を、そして美の価値を、何を通して感じ、そして知るのであろうか。どのようにして外界の刺激を自己の内部に取り入れるのであろうか。

学習指導要領は「表現」を「可視的または不可視的なものを、可視的に表すこと」と示している。そう考えるならば、美術教育における鑑賞の対象は可視的なものと言うことができるだろう。つまり「みる」ことなのである。そして「みることとつくることの一致が創造過程」と松原郁二が述べるように、見ることとつくることが循環するなかで、「感じるこころ」が育まれ、それによってイメージ化されたものが有形化されていくのである。そこで私たちは、「みる」ことを研究の視点として設定した。

「かんじる」
・心理的な契機

美術は見ることから始まる。見て感じ、見て知るということである。しかし、「みる」ことを通して自らに取り込まれた外界の刺激や、美的な価値は、ただ「見る」だけでは、本当の意味で「自らの内に取り込んだ」ことにはならない。ヒトノ目に、感情の働きが加わる時、人間の目になると言われているように、その対象を目にし、「心の働き」によって、(in) と (ex) を循環させることができるのではないだろうか。つまり、本当の意味の (in) とは外界の刺激を心的な経験を通してこそ、自己の内部に取り入れると考えられる。

学習指導要領では、表現や観賞の活動を通して、子ども達の感性を豊かにすることと、豊かな情操を養うことが、その目的の一つとされている。「感性」とは一般的に「価値あるものに気づく感覚」とされている。「感性から分離した知性などない」とモリスも述べるように、「感じるこころ」が育まれなければ、イメージも、創造過程の結果としての作品も生み出されることは無いと言っても過言ではないだろう。

一方、美術教育でいわれる「情操」は「美しいものやよりよいものに憧れ、それを求め続けようとする豊かな心の働き」である。そこで私たちは、心理的

な契機を「かんじる」と捉えて、研究の視点として設定した。

心の目から想像へ

美の対象をみて、そしてかんじることで、子供たちは新たな美の価値を知ることになる。そして自分の中でイメージ(image・imagination)をふくらませていくのである。イメージとは、ある事物に対して、特定の姿を想像することである。そして「想像」とは「実際には経験していない事などを、推し量ること」また、「現前の知覚に与えられていない物事や心像を心に浮かべること」とされている。つまり、視覚を通して自らのうちの取り込んだ美的な価値をもとに、心の中に新たな自分なりの価値思い描くことと言い換えることができよう。心の目で「みる」こと、そして「かんじる」ことこそが「想像」へとつながっていくと考えるのである。

自己の自覚から
世界観の獲得へ

学習指導要領でも示されているとおり、「鑑賞」の指導については、適切かつ十分な授業時数を配当していくべきであり、独立したものとして捉えるべき側面もある。当然ここでいう「みる・かんじる」ことは、独立したものだけを指すのではなく、「かく・つくる」ことや「考える・くふうする」ことと互恵的かつ関係的なものとして考えたい。各学年の実態に応じて、指導の効果を高めるためのものなのである。

子供たちの感性や情操を豊かに育むためには、様々な美の価値に触れさせる必要がある。美的な表現を扱う題材でそれを考えたとき、子供たちが自らの手で美の価値を生み出すためには、「こんなものをつくろう」といったような「題材との出会い」の場面で「新たな美的価値」を「みる・かんじる」必要がある。また、他社理解や相互コミュニケーションの手法を取り入れるときには、「他者の美的価値」に「みる・かんじる」必要がある。前者の場合は自己の存在に気づくこと、後者の場合には他者と自己の違いに気づき、自己を自覚することにつながっていく。そうした多様な価値に触れながら子供たちは世界を獲得していくのである。美的な価値をみて、感じた結果そうなることを本研究では目指したいと考えるのである。

具体的な視点

「みる・感じる」という行為は個人的なものである。しかし学習集団を「学びの共同体」と考えるならば、その個人的なものを、他者との関わり合いの中で深化させていくことができるのではないだろうか。更には教師と児童生徒とが向かい合う関係から、児童生徒と教師が芸術作品もしくはみて感じるべき対象に同じ地平からまなざしを向けるということが重要だと考えた。そこで本研究の具体的な視点を以下の３つとした。

視点１．「対話」を具体的な手だてとして活用する
視点２．「受容」「交流」「統合」というステップを取り入れる
視点３．教師と児童生徒、また児童生徒同士で、美の価値に対する「まなざし」を「共有」する

これらの３つの視点は、各題材における目標の力点のバランスともいえる。評その力点は１年間を通して、また９年間を通して、およそ等しく考えられるべきであり、鋼路スタイル編集のポイントでもある。

指導案【みる・かんじる】　　釧路市立鳥取小学校　1年生　３０名

「ならべてならべて～水彩絵の具の色水づくり」

指導者　岩口　玉季

1　子どもの実態（大会テーマとの関連から）

子ども達は絵を描く活動が好きで、国語科での絵日記、生活科での行事の感想カード等、意欲的に取り組み、気付いたことや楽しかったことを生き生きと描く様子が見られる。休み時間にも自由帳に思い思いの絵を描いている児童が多い。

また、色に興味を持つ子も多く、絵日記や行事の感想カードを描く際、人物の服や景色に必ず色を着けたがり、色鉛筆やクレヨンを用いて丁寧に塗っている。

生活科の“こうえんたんけん”では、飛んでいた蝶や地面にいたアリなどの虫、見つけた草花の色、木や岩の模様を夢中になって「みる」子が多く、“感想カード”には細かくていねいにその様子を描くなど、色や形を豊かに表現することができた。

あさがおの観察日記では、葉や茎の色を混色して描く児童も見られ、どの色を選ぶとあさがおの茎と同じ色になるかを考えるなど「かんじた」ことを表現しようとする意欲も高い。

また、子ども達は絵本が大好きであり、教室に置いてある絵本を休み時間に熱心に読む姿も見られる。保護者の活動である“よみきかせ隊”のお母さんが毎週読み聞かせに来てくれることも楽しみに待っている。

前述のように子ども達は形や色に対して高い興味・関心を示すことから、毎朝の“絵本の読み聞かせ”では色使いの綺麗な絵本を選んで行っている。子ども達は、ページを開く度に、笑ったり黙ったり「きれいだね」「うわぁ！」などと目を輝かせ夢中になって絵本に見入っている。

このように、面白いものやきれいなものを「みる」こと、不思議なものやおもしろいものを探し出すことが大好きな子どもたちである。何事にも興味を持ち、色々な「かんじ方」をすることができる１年生のこの時期に、たくさんの「みる」場面、たくさんの「かんじる」場面を経験させたい。

2　題材について

「どんどんならべて」写真

「ならべてならべて」は１年間で３回予定している造形遊びの活動であり、今回は、プラスチックの容器に２色の水彩絵の具を混ぜて様々な色をつくり、色の変化を考えながら並べる活動を楽しんだり並べ替えたりする活動である。

この活動を通して、混ぜてできる色の美しさ、同じ２色であっても混ぜる量の微妙な違いで色が変化する驚きを体験させたい。

自分の好きな色をつくる、友だちがつくった色と自分がつくった色を比べるという活動に発展したり、様々な並べ方を試す中で「これもきれいだね」「こっちもすごいよ」といった交流が生まれたりすることで、楽しみながら色に対する感覚を高めてほしい。

水彩絵の具は小中学校９年間を通して図画工作科及び美術科で最も多く使用され、子ども達にとっては最も親しむ機会の多い画材である。水彩絵の具の特性を正しく理解するための第一段階として、美しい色を作るためには筆や水の使い方に気を付けたりする必要があることを伝え、水彩絵の具の正しい使い方を身に付けてほしい。

今回の活動を通して、①筆や雑巾の正しい使い方、②美しい色をつくるための水の役割を楽しみながら身につけ、２色の混色だけで多くの美しい色を生み出すこと、を思う存分体験できる機会としたい。

3　題材の目標

・絵の具を混ぜて自分の好きな色を作ろうとしている。　造形への意欲、関心、態度
・友だちと一緒に色水を楽しみながら作っている。
・どんな風に並べたらよいか考えている。　かんがえる・くふうする
・水彩絵の具の特徴を知り、きれいな色水を作る。　かく・つくる
・好きな色水を並べたり色の変化を楽しんだりしている。　みる・かんじる
・自分や友だちのよさを見つけることができる。

4　本時の展開

主な学習活動	○教師の関わり（◎評価の規準と方法）
1．今日の活動内容について知る。 ○赤、青、黄の３色を混ぜてつくった２１色のカプセルを見る。 ・きれいだね。　・色がつながっているね。 ・どうやってつくったの？ ・絵の具でつくったんじゃない？ ・色を混ぜたんじゃない？	○色の変化がわかりやすいようにカプセルを提示する。 ・子どもの自由な発言を促し、色のつくり方を全体で考えていけるようにする。
2．色の混ぜ方を知る。 ・筆に色を付けて水に溶かす。 ・色の調子を見ながら少しずつ混ぜる。 ・１つの筆は同じ色だけに使う。 ・使い終わった筆は、必ず洗ってぞうきんで拭く。	○赤、青、黄の絵の具を提示し混色の仕方を伝える。 ○水彩絵の具の基本的な使い方を説明する。 ・失敗例をいくつか示し美しい色づくりへの意欲を高める。 ・各グループで使用する色は２色に限定し、随時新しい色に交換していく。 ・必要に応じて絵の具を追加する。
3．絵の具を混ぜていろいろな色をつくり、つくった色の調子を見ながら順番に並べる。 １～赤＋黄色　２～黄色＋青　３～青＋赤 ・あっきれいな色になった！ ・同じ色になったから、こっちに少し違う色を足そう。 ・色を比べたらこっちに置くのがいいかな？ ・赤の仲間が多いから黄と青を混ぜた色を増やそう。	◎水彩絵の具の特徴を知り、きれいな色水をつくる。 （技能～観察・発言）
4．色の調子を考えながら、カプセルを並べ替えて遊ぶ。 ・赤の仲間でそろえよう。 ・絵になりそうだね。 ・足りない色をつくろう。	○色の変化に着目して並べられるよう促す。 ◎どんな風に並べたら楽しいかを考えている。 （発想・構想～観察・発言）
5．各グループのカプセルの並び方を鑑賞する。	○各グループの活動を賞賛し、それぞれのよさを具体的に伝える。
6．今日の活動をふりかえる ・ふりかえりカードに記入する。	○すてきなところ、工夫しているところを伝え合うよう促す。

指導案【みる・かんじる】　　釧路市立美原中学校　３年生　３３名

「日本の仏像彫刻のよさ・西洋彫刻のよさ」

指導者　杉山浩彰

１　生徒の実態

本学級は、美術の授業に積極的取り組む姿勢が見られ、発問などに対する反応も良い。特に鑑賞の授業では、技能的な表現が不得意な生徒も苦手意識を持つ事なく授業に参加し、様々な発言やつぶやきを取り入れた授業を展開することができていた。しかし、ピカソやムンクなどといった、中学生にも比較的知られている西洋の作品や作家に比べ、日本の作家や作品については、いかに既知の内容と結び付け、興味関心を持たせるかが、授業を成功させる上で特に大切な要素となっていた。

今回授業で扱う様々な彫刻についても、西洋の彫刻は比較的インパクトがあり、人間そのものを表現しているので親しみが持ちやすいが、仏像については、社会の歴史的分野で若干扱われたり、美術の教科書や資料集などで見たことがある程度で、仏像の種類や造形的な特徴などまでは、あまり知らないし、興味もないと思われる。そこで、仏像にも色々な種類や意味があることや、仏教の用語が日常生活の中にも密接に関係していることを知らせることにより興味を高め、西洋の彫刻と比較鑑賞することにより、仏像彫刻の奥深さや日本の伝統美にも気付かせ、自国と他国の伝統や文化のよさを教えていきたいと考えている。

２　題材について

日本の仏像彫刻は、中学生にとって必ずしも魅力のある鑑賞対象にはならない。第一印象として、「怖い」「暗い」「古い」といった、マイナスのイメージが働いてしまうからである。しかし、これらのイメージは、あくまでも表面的な印象から来るもので、仏像彫刻を深く知った上でのイメージではないと考える。また、西洋の彫刻も仏像の彫刻ほどマイナスのイメージは無いが、「裸」「見たことがある」程度で、作品名もあまり知らないと思われる。そこで本単元では、「釈迦三尊像」や「阿弥陀如来像」といった「如来」「菩薩」「明王」「天部」といった造形的に特徴のはっきりしている彫刻や、「ミロのヴィーナス」や「サモトラのニケ」などといった、比較的知られていると予想される彫刻を題材にしている。

今回の授業は、「受容」「交流」「統合」という鑑賞の基本的なプロセスに沿って行う。その流れは、はじめに興味関心を高めるために、発表や模写といった様々な活動をしながら作品を鑑賞させ、そこからそれぞれの彫刻の造形的特徴や価値観の違いといった美的価値に気づき（日本の仏像彫刻は心の在り方を尊重し、西洋の彫刻は理想的な人体美を求める）、さらにその美的価値から、自らの新たな美的価値を見つけ出し、自らの感想や考えと他者の美的価値と交流し合うことによって、次の鑑賞や制作といった美的創造活動につなげていくというものである。

学習指導要領では、鑑賞の活動を通して「日本及び諸外国の美術の文化遺産を鑑賞し、表現の相違と共通性に気付き、それぞれのよさや美しさ、創造力の豊かさなどを味わい、文化遺産を尊重するとともに、美術を通した国際理解を深めること。」となっているが、今回の授業を通して、自国と他国の文化的なよさや特徴といった多様な価値に気付かせるとともに、新しい発見や違う価値観を知ることによる喜びや楽しみを味わわせたい。そして、そこから「感動する心」を高め、新しいものに出会い発見した時にじっくりと見つめることができるまなざしを育てたいと考える。

3　題材の目標

・日本の仏像彫刻と西洋の彫刻の造形的な特徴を知ることができるようにする。
（美術への関心・意欲・態度）

・日本の仏像彫刻と西洋の彫刻のそれぞれのよさに気付くとともに、価値観を理解したうえで、作品を鑑賞することができるようにする。（みる・かんじる）

4　題材の流れ（本時　2／2）

児童・生徒の活動の様子	教師のかかわり・指導のポイント
・「仏像」という言葉から発想するものを発表する。 ・仏像の名前で知っているものをあげる。	・仏像に興味を持たせる。
・仏像をスケッチすることを通して、ファッションやアクセサリー、ヘアースタイル、持っているものから、仏像の特徴を知る。	・仏像をスケッチすることにより、特徴を理解させる。
・仏像が、如来、菩薩、明王、天部に大きく分類されることを知る。	・仏像の種類と特徴を知らせる。
本時 ・西洋の彫刻の特徴を理解し、表現したかったものを考え、発表する。	・西洋彫刻が表現する、人間の理想美を理解させる。
・西洋の彫刻と比較することにより、仏像彫刻の表現したかったものを考え、発表する。	・仏像の精神性を理解させる。
・仏像彫刻と西洋の彫刻を比較して、どちらが心をひかれるか。どちらか選んで、その理由も書く。	・仏像彫刻と西洋彫刻の、それぞれのよさに気付かせる。
・お互いの感想を発表し合い、交流を深める。	・自分の考えをしっかり発表するとともに、友達の発表もしっかり聞かせる。
・授業を通して、わかったことや感じたことを書く。	・本時の自己評価をさせる。

提言「みる・かんじる」　　小学校全学年　浜中町立貰人小学校

『子ども達がお互いの作品を見て、そのよさを感じる手立てとしての問いかけ』

提言者・日野　道子

1、全校合同図工

本校は全校児童８名の極小規模校のため、図工は全学年合同で行っている。同じ題材を全学年で取り組むこともあれば、学年によって題材を変えることもある。子ども達は、とても素直で活発で、図工はいつも楽しんで活動してくれている。

2、以前までの子ども達の「見方・感じ方」

私が本校に赴任して１年目の図工の時間。子ども達から「○○ちゃんって絵うまいよね」「私、絵うまくかけないからやだなぁ」と気になる言葉が聞こえて来た。そして、作品の発表会では、「やっぱり○○ちゃんは」「さすが○○くん」などの言葉。この時私は、子ども達同士の評価に固定概念が表れていることが気になった。

８人の子ども達は、幼少時からずっと同じ地域で育ってきている。このような環境では、幼い頃に築かれた人間関係やその子の特徴は、大きくなっても周囲からの見方が変わらない傾向にある。私は、このような幼い頃からの友達への決めつけた見方を少しでも無くしたいと思った。それと一緒に、「うまい絵」という見方も壊してしまいたいと思った。

3、子ども達の「見方・感じ方」を広げるために

見たり感じたりすることは、どんな子でも自由に行える。けれども、ただ自由に見て感じるのと違い、何をどんなふうに、などと意識的に見たり感じたりすることで、その後の思いのふくらみ方や創造力が豊かになるのではないかと思う。そこで、子ども達の意識を方向付けるために教師の「問いかけ」が必要となる。以下、これまでの実践から、子ども達の見方を広げ感じ方を認め合うための問いかけのあり方を考えていく。

【問いかけ１】ほめまくり作戦

先生から個々へ対する「いいね」「すごいね」で、子ども達は徐々に自信をつけていった。しかし、先生と子どもの一対一の共感にとどまり、子ども達相互の認め合いにはつなげられなかった。まだこの頃は「図工で人の真似をしてはいけない」という思い込みが子ども達にあり、私が誰かを賞賛していても、周りの子は自分とは無関係であるかのような素振りだった。

【問いかけ２】まね奨励作戦

友達のよさを見取り、よいと感じたことを自作に生かすことを奨励した。しだいに子ども達の中で「○○君のおかげでかっこよくできたんだよ」などの言葉を掛け合う姿も見られるようになってきた。

【問いかけ３】図工カード作戦

子ども達自身の達成感や目的意識を明確にするために、授業の最後に自己評価『図工カード』を行っている。ある時、この図工カードの設問内容が、意外にも子ども達の見方や感じ方に影響を与えていることに気づいた。

以前、子ども達が「いい作品をつくる」と言ったので、いい作品とはどのようなものなのか聞き返すと、「納得のいく作品」「満足できる作品」「思い通りにつくれた作品」との返答。「上手」や「きれい」などの返答を予想していた私には嬉しい期待はずれであった。

子どもの言う「思い通りに」とは、図工カードの設問によく登場する言葉である。このことから、図工カードの継続利用には、子ども達の意識を方向付ける可能性を感じさせられた。反面、価値観の誘導にならないように、設問内容には気をつける必要もある。

問いかけは、大人の価値観の押し付けではなく、子ども達の見方を広げ、感じ方を認め合うための手立てである。先生として、子ども達がつながり合い、思いを広げていける橋渡しの役割を果たしていきたい。

4、教師の問いかけと子ども達の見方・感じ方の方向性

①考えを聞く
　「どうしてこれを使ってみたの」
　・・・自分の見方や感じ方を確かめられる。
②助言する「こうしてみたら」
　・・・活動の方向付け。見通しがたてられる。
③ほめる「素敵だね」
　・・・これでいいとわかる。
④考えさせる
　「どうしたらもっと思いが伝わるかな」
　・・・工夫の余地があると気づく。
⑤予想を投げかける「これは○○かな」
　・・・人にどう思われているか気づく。
⑥紹介する
　「○○君はこんなふうにしているね」
　・・・自分以外の表現方法に気づく。
⑦交流・まねさせる
　「いいと思ったことはまねしよう」
　・・・自分は他者のよさを感じとれるということがわかる。
⑧自己評価カードの設問
　・・・活動時の意識の持ち方がわかる。

提言「みる・かんじる」　　中学校１年　北海道教育大学附属釧路中学校

『美術館における対話型鑑賞教育モデルの開発』

提言者・花輪　大輔

１．はじめに

本校の生徒の実態は、「美術を好き・まあ好き」という生徒が70%を超えており、美術への関心が高い生徒が多い。「美術についてのいろいろな話を聞かせてほしい」という生徒の声もよく聞かれる。また、画家や作家の名前や、その作風の特徴を「知識」として知っている生徒が多い。しかし、「知っている」ことと「味わう」こととは異なり、実際に本物の作品に触れた体験のある生徒は２割程度である。もちろん「感じた」わけでなく「知っているだけ」であるから、作品制作の授業でイメージが広がらずに困っている生徒も少なくない。

２．題材について

本題材（実践）は、昨年 11 月に釧路市立美術館で開催された、「第 81 回道展釧路移動展」で作品を鑑賞し、小集団でギャラリートークをしながら「美術」に関する見方・考え方を深めるというものである。この題材の実践を公募展（道展）としたのは、日本画・油彩・水彩・版画・彫刻・工芸の６部門、さらには様々な作風の作品に生徒達が触れられると考えたからである。

ギャラリートークを取り入れたのは、「アートとは、作品の中に込められているものだけではなく、人間との間に生じる関係」というアレナスの考え方が根本にある。また、アレナスの鑑賞方法には「受容」「交流」「統合」というステップが含まれるが、これをロジャースの理論と重ね、構成的グループエンカウンターの含みも持たせたいと考えた。

３．題材目標（５．本時の目標）

１．作品の鑑賞を通して、作者と対話しようとすることができる。
２．北海道在住の作家の作品に数多く触れることで、美術的な「表現」に対する見方・考え方を深めるとともに、自己の表現に生かそうとすることができる。
３．作品に対する自己の思いや考えを、他者と伝え合うことができる。

４．題材の流れ（６．本時の展開）

※２時間扱い
１．展覧会のマナーや、今日のプログラムの説明を受ける
２．展示されている作品を鑑賞し、その中から平面作品・立体作品それぞれ１点ずつ、「おすすめ作品」のレポートを作成する。
３．レポートをもとに、グループで「おすすめ作品」についてのギャラリートークを開始する
４．今日の取組の振り返りをする

７．活動を終えて

前回の学習指導要領改訂で、美術館との連携が示された。このことは、従来の鑑賞教育以上に、積極的かつ多面的な可能性を示唆するものである。

本題材では、アレナスの「対話型鑑賞」を実際の美術館で、それも生徒間で実施した。題材目標の２に関する自己評価の学年平均は4.1と高く、実際の筆遣いや作家の呼吸を感じることができたと答えた生徒は80%を超えた。また、生徒自身が「対話」をきっかけとした活動を作品制作場面でも有効に活用できるようになってきている。この実践後に様々な図録の貸し出しが増えたことも成果として考えている。また、本題材の成果というべきではないかもしれないが、長期休業の課題としている「展覧会レポート」や「美術新聞」が、夏休み後のものよりも、冬休み後のもののクォリティーが格段に高くなったということである。

生徒たちの人間的な発達を促すためにも、本物の芸術作品と直に触れ合う機会を、積極的に作るべきだと考えている。

かく・つくる

9:10　　10:10

小学校2年
「みてみておはなし」(60 分)
授業者　佐藤　幸
《1F　東側学年棟》

9:20　　10:20

小学校6年
「自然からのおくりもの」(60 分)
授業者　国井　彩子
《2F　図工室》

9:40　　10:30

高校選択
「模様でつくる切り絵の制作」(50 分)
授業者　竹本　万亀
《3F　東側学年棟》

9:15　　10:05

中学校2年
「抽象彫刻をつくる」(50 分)
授業者　更科　結希
《3F　西側学年棟》

基調提案

かく・つくる

かく・つくる

子ども達の思いや願いなどの心の動きやイメージの広がりなど**心の学力＝みえない学力を作品＝みえる学力**として表出させることに「創造的な技能」は大きな影響を及ぼしている。

図画工作科・美術科の活動の中で「創造的な技能」を高めていくことは、子ども達が思いや願いを形にする喜び、それを他者から認められるという喜びを体験し、「つくる喜び」と「感動する心」を深めていく事につながる。

活動の中で子ども達は、以下のような経験を積みながら「創造的な技能」を高めていくことになる。

○**道具を正しく使って**かいたり、つくったりする。
○**素材を生かして**かいたり、つくったりする。
○**工夫して**かいたり、つくったりする。

つまり、子ども達の「創造的な技能」は**「かく・つくる」**活動の中での経験や知識の積み重ねによって育まれる。

子ども達の現状

子ども達は、就学前に様々な造形的な活動を経験してきている。活動の度に道具の正しい使い方や素材の生かし方を紹介されたり、指導されてきていると考えられるが、入学時に定着していることはあまり多くないのが現状である。

しかし、その後の小学校でも基本的な事項を継続的に指導しているとは言い難い。そして、子ども達の学年が上がり、ものの善し悪しを判断する眼が育ってくるにつれ、自分の活動や作品に満足することができなくなる。その結果、徐々に造形的な表現が楽しくなくなるという状況が生み出される。中には、活動の中で自ら気づき、工夫していくことができる子供が見られるが、それは決して多くはない。

特に様々な道具や素材を用いて表現することが多い**「かく・つくる」**活動で、このような傾向が見られるのではないだろうか。

私たちは**「かく・つくる」**活動で、それぞれの道具の正しい使い方や技法を提示し、それを繰り返し経験させていくことが必要だと考えている。

正しく道具を用いることができた子ども達

子ども達は、新しい道具が大好きである。「何に使うのかな。」「どんな風に使うのかな。」「ちょっとこわいな。」と思いながらおそるおそる手にする。

そこで、道具の使い方を知り、正しく用いることによって、素材を自分の思い通りに形を変えることができた時、子ども達は自分の表現に満足感や充実感を得ることができる。そして、その道具を様々な題材で繰り返し使用し、成長に従ってより高度な使い方を経験することで、表現する喜びは深まっていくだろう。

表現技法を自分のものにした子ども達

また、それぞれの道具や素材には、それにあった表現技法が存在する。

子ども達は新たな表現技法に出会ったとき「わあ、きれいだな」「どうやってやるのかな？」「やってみたいなあ」と素直な感動を覚える。つまり、出会いの感動が大きければ大きいほど子ども達の興味関心は深まるため、出会わせ方が重要となる。その技法を試し、自分でも同じようにできたとき、子ども達の感動はさらに大きくなる。それは「もっとやってみたい」という新たな興味・関心を生み出す。

このような経験を継続することで、子ども達は、その有効性を実感することができ、その道具や技法は、自分の思い通り表現するためのツールとして定着する。それは「つくる喜び」を実感させ、それを深めようとしたり、別な表現方法を求めていこうとする意欲を増していくことにつながる。中学・高校では教師の意図したものを遥かに超えた技法や素材の生かし方を見せる生徒も現れてくる。

しかし、正しい使い方を知らずに、その道具が本来持つ性能を自分の表現に生かし切れていない姿や、表現技法を思い通りに用いることができず、自分なりの方法を繰り返す姿を目にすることが多いのではないだろうか

教師が意識しなければならないこと

素材に合った道具や技法は、昔から決まったものが存在する。各学級や子ども達の状態に合わせたアレンジが必要な場合も考えられるが、多くの場合、一般的なものを用いることがベストであろう。

また、表現したいものやこと、使用したい素材には、それぞれ適した「やり方」が必ず存在する。私たちは、それをしっかりと学び、子ども達にタイミング良く提示し、それを繰り返して伝えなければならない。その結果、子ども達がその技法や道具の良さを自分の活動や作品から感じることができたときはじめて、それらが「自分のもの」として定着することになる。

自分の手でやってみる

小学校では、子ども達に指導する際に教師が使用する「指導書」の巻末に、その教科書で紹介している題材で使用する道具の基本的な使い方やそれを用いた基本的な技法がわかりやすく掲載されていることが多い。

また「**くしろスタイル**」にも、私たちが「これだけは押さえておきたい！」と思われる道具の基本的な使い方や技法を掲載している。

子どもの視点に立って

子ども達に道具や技法を提示する前に、教師が「**自分の手で試してみる**」ことで、「かんたんにできること」「なかなかむずかしいこと」「手や体の動かし方のコツ」を体験することができる。これは、子ども達が道具や技法を用いる時に感じたり考えたりすることを教師自らが知ることになり、それが、子ども達への具体的な提示や困っている児童に対する支援の大きなヒントになる。

「かく・つくる」の力を伸ばしていくことは簡単にできることではないが、教師と子どもが一緒に「つくる喜び」と「感動する心」を持つことのできる活動を積み重ねていくことで可能になると考えている。

指導案【かく・つくる】　　釧路市立芦野小学校　２年生　３３名

「みて、みておはなし」

指導者　佐藤　幸

１　子どもの実態

本学級の子どもは、素直で何事にも前向きに意欲的に取り組むことができる子が多い。また、友達の良さやがんばりを見つけ伝えること、友達の良いところから学ぶことができ、自分の作品に愛着を持ち大切にしている子も多くいる。しかし、失敗することをおそれ自信を持って活動できない子や「思い」を十分に膨らませることができない子もいる。

休み時間には、自由帳にお絵かきをして友達と楽しく交流している姿が見られ、全体的に子どもたちは、「描く」ことが好きである。ただし、図工の時間になると「うまくかけない。」「何を描くか決められない。」と描き始めることができないことや何度も描き直して進まないことがあった。しかし、１年時に「どうぶつのえ」、「わくわくどきどき」の題材で「どうぶつの顔を大きく描こう。」「人をたくさん描いてあげよう。」と声をかけ、やるべきことを明確にしてやると、子どもたちは、目標を持って取り組み、達成感を得て活動が活発になった。このことから、どもたちが「やってみたいな。」という思いを持てる題材を選び、活動の見通しを持たせてやることで子どもたちは「できた」喜びを感じることができると考える。

また、イメージを広げたり、深めていくために友達との交流の時間を持ち作品への「思い」や「願い」を持って活動できるようにし自分の表現に自信を持って取り組み、その子らしさが発揮されることを期待している。

２　題材について

本題材は、子どもたちが「ふしぎなたまご」のお話から、それぞれ自分なりの「ふしぎなたまご」を考え、その中から生まれる「何か」へとお話の世界を広げながら作品をつくっていくことになる。

子どもたちは、お話から、イメージを膨らませ、好きな色の色画用紙を選び、自分の好きな模様を描いたり、好きな形に切り抜いたりして、自分だけの「ふしぎなたまご」を生みだすだろう。その「たまご」を二つに割ることによって、そこから生まれる「何か」にドキドキわくわくしながら、さらにイメージを膨らませることができると考える。

そして、たまごとは別の画用紙にクレヨンやサインペンを用いてたまごから生まれる登場人物や場面の様子を描きはじめる。ここで、描いたものを切り抜いてコラージュすることを知らせることで、失敗することを心配せずにダイナミックに描いたり、想像したことをどんどん描いて広げていくことができるようにしていきたい。

そして、「ふしぎなたまご」やそこから生まれる「何か」を組み合わせて画面構成するための場面や背景を水彩絵の具を用いて画用紙に描く。子どもたちは、ふしぎなたまごや登場人物を構成し、楽しみながら自分なりに表現することでお話の世界や物語をさらに広げていくと考える。

制作活動中は、友達や教師に自分の作品について話したり、友達の表わしたいことを聞いたりしながら進めていくことでそれぞれの物語の世界を深めたり、明確にしたりしながら進めていきたい。

水彩絵の具については、１年生の時に「どうぶつのえ」の背景の着色に使用しただけで絵の具を用いて何かを描いた経験はない。今回、水彩絵の具の基本的な使い方を定着させると共に、様々な濃さの塗り方を経験させお話の世界を表現することに生かしていけるようにしたい。

3　題材の目標

・お話から、感じたり考えたりしたことをいろいろな方法で表すことを楽しむことができる。
（造形への意欲・関心・態度）

・自分なりにイメージを広げ周りの様子や背景などを楽しく表すことができる。
（かんがえる・くふうする）

・表したい場面の思いや様子を形や色の使い方を工夫して表すことができる。
（かく・つくる）

・自分や友達の作品を見て、表したかったことを話したり聞いたりして楽しく見ることができる。
（みる・かんじる）

4　題材の流れ（本時　5／6）

	児童の活動の様子	○教師のかかわり（◎評価規準）
1・2	○お話を聞いて描きたいものや場面を想像する。 ・どんなたまごか ・たまごからどんなものがとび出してくるか。 ○想像した物語の登場人物を中心に線画材を使い自由に描く。 ・クレヨン ・サインペン ・ゲルマーカー ・自分のイメージにあった画材で自由に描く。	○一人一人が自分だけのたまごを描きながらお話の続きを楽しく想像し、自分のお話への「思い」を持てるようにする。 ○画材を紹介し、イメージに合った画材の選択を促す。 ○画用紙を無駄にしないように配置して描いたり、形に合わせたはさみの使い方を確認する。 ○思いついたものを次々と描き、新しいお話を想像していくようにする。 ◎登場人物の様子を自分なりにイメージを広げている。（発～発言、つぶやき）
3・4	○水彩絵の具の使い方の確認をする。 ○背景の様子を想像し水彩絵の具を用いて描く。	○水彩絵の具の使い方の復習をする。 ○個々の活動を賞賛し活動の様子を取り上げる。 ◎水彩絵の具を正しく使い描いている。（かく・つくる～観察、作品）
5本時6	○登場人物を切り抜き、「たまご」を中心に並べながら画面構成をする。 ○描き加えたり、貼り足したりして作品を完成させる。 ・画面全体を見ながら、自分の想像した画面ができるように登場人物や背景を描き加える。 ・想像した画面になるよう、遊びながら登場人物を貼り付けていく。 ○作品を鑑賞し、登場人物の様子や工夫したところを交流する。 ・作品の良さを伝え合う。	○登場人物を動かし楽しみながら画面構成できるようにする。 ○個々の活動を賞賛し活動の様子を取り上げる。 ○広がったり、新しく思いついたお話を交流できるようにする。 ◎クレヨンやはさみなど道具を正しく使って活動している。（かく・つくる～観察、作品） ◎登場人物の様子や背景を自分なりにイメージを広げている。（かんがえる・くふうする～発言、作品） ○想像したお話を聞き合っておもしろいところを交流できるようにする。 ◎自分や友達の作品を見ておもしろいところや工夫しているところを関心を持って見る。（みる・かんじる～作品カード、発言、つぶやき）

指導案【かく・つくる】　　釧路市立美原小学校　６年３組　２８名

「自然からのおくりもの　～思いを寄せ合って～」

指導者　国井　彩子

１　子どもの実態

本学級の児童は素直な子が多い。全体的に男女問わず仲もよく，色々な場面で友達の良いところやがんばりを認め，励ますことのできる子や、困っている子に自然と手を貸すことのできる子も多い。その一方，自分に自信が持てず，何か新しい活動をする時に，積極的に取り掛かれる子は限られている。また，やってみて困難を感じると，「自分はできない。」とすぐにあきらめてしまう子もいる。しかし，がんばりをほめられたり，認められたりすると，良い事に向かって前向きに取り組むことができるようになる子がほとんどである。

子ども達の中には図工に苦手意識を持っている子もいる。しかし，表し方が分かり，自分の表したいように表せた時，とても喜んだり，満足したりする。また，図工の中でも特に立体に表すことが好きな子が多い。昨年，流木を使った物作りを行った。教師が初めに見せたいくつかの作品例を楽しんで鑑賞し，「自分も作りたい。」と声をあげた。初めは，あまり主体的でなかった素材集めも，この後から意欲的になり，素材ボックスは流木などであふれた。そして，その「宝箱」の周りに集まり，「これ，鳥に見える。」「これ使いたい。」と，目を輝かせた。素材を手にし，「作りたい。」という思いが高まり，いつもは時間のかかる構想の時間も，ほとんどの子があまり悩むことなくアイディア図を描き進めた。のこぎりや小刀の扱いの練習をしたこともあり，制作では自分の思いをどんどん形にしていった。この学習を通して，子ども達が「作ってみたい。」という思いを初めから持てる魅力的で，かつ「できた。」と最後に達成感を感じられる題材選びが重要であると感じた。さらには，自分の思い通りの作品を作るための見通しが持てる題材の流れが大切であるとも感じた。

もともとは作ることが大好きな子ども達が作品作りに満足し，「やっぱり作るのって楽しい。」「もっと色々な物を作りたい。」という思いを持てるようにしたい。

２　題材について

本題材では，昨年から子ども達が集めてきている流木を中心とした身の回りの自然素材（落ち葉，木の実，小石など）を組み合わせながら作品を作っていく。その素材の持っている性質や形などの特性を感じ取り，「これは，○○に見えるな。」「こんな形の素材がほしいな。」というように素材を見立て，その特徴をうまく生かした制作が行えるようにしていきたい。素材に興味を持ち，自分の使いたい素材にこだわりをもって素材集めをする姿を期待したい。

昨年は，同じ素材を使って自分の作りたい物を思いのままに作った。本題材では，同じテーマを選んだ子同士がグループを作って制作していく。自然と様々な発想や表し方があることに気づき，自分の表現に生かしたり，一緒に考えたりするなど，互いに学び合っていけるようにするためである。しかし，その際，一人一人の思いを大切にするように配慮する。

また，計画の段階では，すでに集めた素材を前にし，その材料や用具に触れ，表したいことを見つけられるようにする。制作中も立てた計画図と手にした素材を見比べて，配置やバランスを見直しながら活動を進めていけるようにしたい。

道具では，のこぎりや小刀やホットボンドなどを使う。昨年も経験をしていて慣れており，使うこと自体を楽しんでいるような子もいる。そこで，必要に応じて，安全な使い方の確認をしたり，具体的な手法や技法を提示したりしていきたい。また，ふり返りカードを元に制作の仕方を交流できる場も設定する。そして，子ども達が自分に合った方法を選んで制作に取り掛かれるようにしていきたい。ヒントコーナーなどを設けるなど活動中にも確認できるようにも工夫したい。

この題材を通して，自然素材を活用したり，友達と思いを寄せ合って制作する楽しさを実感してほしい。そして，自分の満足する作品を作り上げた自信を今後の作品制作の意欲につなげてほしい。

3　題材の目標

・作り出す喜びを味わいながら，進んで活動することができるようにする。
（造形への関心・意欲・態度）

・テーマに合った作品制作のため，素材の特性を生かしながら，素材を選んだり，表し方を考えたり，適切な道具を選んだりすることができるようにする。（かんがえる・くふうする）

・素材の特性を生かして，適切に道具を使用し，作りたい作品を作ることができるようにする。
（かく・つくる）

・素材の特性を生かす良さを知り，互いの作品の良さを見つけることができるようにする。
（みる・かんじる）

4　題材の流れ（本時　6／8）　　☆は各家庭での放課後の活動である。

時間	児童の活動の様子	○教師の関わり（◎評価規準と方法）
☆	○素材集めをする。	○素材ボックスに目を向けさせ，素材集めをするよう呼びかける。 ◎色々な自然の素材を集めてきている。 （関心・意欲・態度～素材）
1 2	○昨年自分たちが作った作品とテーマ性のある作品を鑑賞し，作品作りへの意欲と見通しを持つ。 ○どんなテーマで制作するかを話し合う。 ・動物　・兵隊　・音楽隊など	○作品作りと素材収集への意欲を喚起し，学習の見通しが持てるようにする。 ○素材の特性を考えてテーマや作りたいものを考えられるよう助言する。 ◎様々な作品を鑑賞し，自分も作ってみたいという思いを持つことができる。（関心・意欲・態度～観察）
3	○集めた素材を見ながら，自分はどんなものを作るか計画を立てる。 ・素材の見立て ・必要な材料や道具	○児童と共に素材を見立てたり，必要な材料などの助言を与えたりする。 ◎　素材の特性やテーマを考えて，作りたいものを構想している。 （かんがえる・くふうする～観察・計画カード）
☆	○素材集めをする。	○児童が使いそうな素材や使ってほしい素材などをたくさん集めておく。 ◎自分の作りたいものに合った素材を集めてきている。 （関心・意欲・態度～素材）
4 5 6 7	○素材を生かして，道具を工夫しながら作りたいものを作る。 ・素材を見立てる。 （流木，落ち葉，木の実など） ・素材をうまく組み合わせて作りたいものを作る。 ○作品を並べて見て，作り足したり，作り直したりする。	○児童同士の学び合いの場を大切にしながら，素材や道具の特性を生かした制作ができるようにする。 ○自分達の作品作りを時々見直せるようにも促す。 ◎素材や道具の特性を生かして，組み合わせを試したり，制作したりしている。 （かく・つくる～観察・行動・作品） ◎自分の作りたい作品になるように，色々な素材や道具を選んで，制作活動を進めている。 （かんがえる・くふうする～観察・作品）
8	○作品を鑑賞し合い，互いの作品の良さを見つける。	◎テーマにあった作品や素材の特性を生かして作っている作品の良さを見つけ合う。（みる・かんじる～観察・カード）

指導案【かく・つくる】　　北海道釧路星園高等学校　２年生　２６名

「模様でつくる切り絵の制作」

指導者　竹本　万亀

１　生徒の実態

本校は生活文化科・福祉科をもつ道内唯一の公立の女子校である。しかし、市内他２校と統合となり、今年度、新入生はいない。年々間口が減り、２学年２クラス、３学年３クラスとなった。

女子生徒だけということもありのびのび活動する反面、集中力に欠け、こつこつ続けることを苦手とする生徒も多い。学習に関しても、これまで「できた」喜びをなかなか得られずに来た様子がうかがえる。

美術の授業ではこのような生徒達の感覚を無心なまでにひきこむことを目指した。その先に「できた！」を実感し、同時に、自らの手で、感覚で、つくりだしたものの美しさに感動する瞬間をうみだす。友達からの「いいね」にも、また新たな感動をおぼえる。

この「できた！」の喜びと、美しさ・他からの評価による感動を味わう積み重ねが、自分のよさ、らしさを認め、将来への活力になってゆくだろうと考えている。

２　題材について

○○○○○○○○○○○○○○○○

黒い画用紙に色鉛筆で描かれた下描きから、単純な形（□四角・△三角・アーモンド型）を組み合わせた模様で切り抜いてゆく。単純な模様を組み合わせて切り進めていく中で、白黒のバランスの美しさに気づいてゆく。はじめから「きっちり」バランスを計算して取り組むのではなく、切ってゆく中で白黒のバランスを意識し、変更する「ゆるさ」も残す。黒い画用紙に色鉛筆で描かれた下描きから、制作の時間の経過と共にそれぞれの生徒の感覚で変化しながら切り絵が形づくられていく。

切り絵の集中力・・・・・・落ち着きのない子も、のめり込む

デザインカッターを扱うには刃先に神経を集中させなければならない。これが夢中になれる時間をつくる。

切り絵は比較的単純な絵画技法。「切る」ことが「出来上がる」ことと直結していることも作業を持続できる理由と考える。

切り絵の切る技能・・・・・道具（デザインカッター１本！）を創造的に活用

線の切れ味を感じとる。作品の表情が生きるも死ぬも、線の切れ具合い、勢い！

パソコンで自由に描ける時代であるが、それだけに手作りの技法がより魅力あるものとなる。

今回の切り絵は画面から形を抜き取ってゆく作業のため、線よりも面で構成される部分が多い。そのためまちがって切りすぎても、必ずどこかでつながっている。「切ってしまったらすべて終り、残念！」とあきらめなくてもよい状態を生徒に残す。

また、作品画面が小さいことで、「自分でも完成させられる」希望をもたせる。また、小さな画面ではあるが、細かい切り抜きと残す黒い面とのバランスで、それ以上のひろがりを感じさせることができる。

3　題材の目標

◎やるきになる・むちゅうになる
「切る」という集中力のいる作業にのめりこむ、夢中になる瞬間をもたせる。そして、「やった！」「できた！」の満足感、達成感が得られるようにする。　（造形への意欲・関心・態度）

◎かんがえる・くふうする
単純な模様の組み合わせをいかせるようにする。考えながら（バランスの美しさによって模様をかえたりして、柔軟に対処しながら）切り進めるようにする。　（発想・構想の能力）

◎かく・つくる
くり返しの模様により、デザインカッターで切る技術を身につけるようにする。さらにできる生徒は、切りながら描いてゆくような感覚を身につける。　（創造的な技能）

◎みる・かんじる
制作の途中で、作品を光にかざすよううながし、線の切れ味、勢いを感じることができるようにする。ほっと一息ついた時に、友だちの作品をみて心を動かすことができるようにする。
（鑑賞の能力）

4　題材の流れ（本時　７／８）

生徒の活動の様子	教師のかかわり・指導のポイント
①②模様のサンプル作品をデザインする 単純な模様を組み合わせたデザインを考えよう。サンプルを参考に１６パターンひねりだす。 これは残す部分？切り抜く部分？	きっちりではなくかるく描いた線でよし。（下絵で描いた線をなぞって切るのではなく、線の切れ味、勢いをより多く感じてもらうため） 色鉛筆で描き判断する
③④模様のサンプル作品を切る 切り方の順を参考にデザインカッターで切り抜く。 どこから切る？	面面の中心あたりから切り始めるとよい ←なぜ？ 細かいところから手をつけるとよい ←なぜ？
⑤⑥サンプル作品を参考に、模様をいかしたデザインを考える 自然界の生き物、植物をモチーフに輪郭線を描く。 生き物のかたちってすてきだね	面積のあるもの・シルエットで考えるとよい ＊地元釧路にちなんだ生き物資料も紹介
本時 ⑦⑧デザインしたものを切る（本時） 切り進める中でも、白黒のバランスをみる。 サンプルよりもうまく切りたい 下絵とちょっとかえてみたい！ 完成した作品をスプレーのりで白い画用紙にはる。	・・・どこから切っていけば作業しやすいか考えて！ 白黒のバランスを予測すること、シルエットが残されることを意識する 廊下に展示することを予告する ならべて見る美しさ、離れて見る美しさを感じよう

指導案【かく・つくる】　　釧路町立遠矢中学校　２年生　３４名

「抽象彫刻をつくる」

指導者　更科　結希

１　生徒の実態

本学級は、美術に対する意欲はあり、作ることに対してこだわりをもって取り組む生徒が多い、そのため時間がたくさんかかることがしばしばある。作業の取りかかりは早く、手を動かす子が多い。意欲はあるので、自ら工夫して作品を仕上げようとする場面も多く見られる。自分の気持ちをまとめることを苦手としている生徒も多い。自分の気持ちに向き合うことから目をそらしている面もある。中学２年生になると、今まで授業の中で扱われてきた具象的な考えから離れ、抽象的なものごとの考え方がある程度できるようになってくる。１年次から、ものをじっくりと見つめ描くという授業を重ねてきて、初めて取り組むことのできる造形表現である。しかし抽象作品は、美術の世界の中でも、とりわけ理解するには難しい分野であり、観る側に「美術は難解なもの」と感じさせてしまっている。それは、作品がそれが何を示すのかがはっきりわからないものであるからだ。生涯学習を考えても、この題材を勉強することで、抽象作品の見方や楽しみ方を理解しておくことも重要ではないかと考えている。したがって、この題材を通して子どもたちには、創意工夫面をより一層向上させ、自分を見つめながら作品を最後まで作り上げる達成感や、抽象彫刻に対する理解を深め味わせたいと考えている。

２　題材について

本題材は、自分の想いを探りながら立体的な思考により、抽象的に作品をイメージして、制作する表現活動である。抽象という主題を設定した上で、表面処理のしやすさや素材の丈夫さを考慮し、石膏ブロックを使っての彫造が適切であると判断した。石膏と水と紙パックでブロックづくりから始めることにも、自分でできるかぎり材料もつくる経験をさせたいという理由がある。使うものは全て準備され、どのような素材でつくられているのかも関心がないまま作る作品は、愛着がわかない。

難しさや時間を多く費やす題材でも、その題材だからこそ身に付く力がある。本校の生徒には、自分の想いを生かした作品作りを体験したり、作品を根気強く最後まで作り上げる力を身につけさせたいという想いがあった。

本来抽象作品は、意味を持つものばかりではない。しかし、中学生で扱う場合には、テーマをもたせテーマにそった作品に仕上げていくことが大切である。そこで、自分のテーマを探し、そのイメージから抽象的な形をつくるよう設定した。

テーマは与えるのではなく、個人の気持ちの中から生まれてくるものでなければ、作品に対して意欲や向上、ましてや最後まで作り上げる・やり遂げる気持ちは表れてこない。一人ひとりの想いを引き出し、その発想を作品に結びつけていくことが今回の作品での重要な場面になる。

抽象的な作品は自らの心で何を考え、表現したいかが大切である。本題材は、自らの心を抽象形態を通して表現していく。一見外から見ると何を表現しているかは作者にしかわからない。本人のしまっておきたい気持ちや考えたテーマを見る側も想像できる興味深い題材であると考える。

なにより、子ども達には新たな分野に挑戦する気持ちを味あわせたい。立体作品を扱う理由としては、立体的な思考は一方向からの考えではなく、多面的な発想が必要とされる。柔軟な発想の育成につながるものであると考えた。実際の彫る作業では、彫刻することを意識させ、手順をしっかりと理解させる必要がある。そのために、ポートフォリオを効果的に使って制作に生かしていく。

3　題材の目標

・ 制作を通して自分の思いを練り上げ、自分にしかつくれない彫刻にしようとする姿勢を養う。（造形への意欲、関心、態度）
・ 完成までの制作の計画を意識させ、自分の作品のイメージを膨らませる努力をしながら、制作していく力を育てる。（かんがえる・くふうする）
・ 思い描いた形に近づくよう、的確に彫り進めることができるようにし、工夫しながら制作を行えるようにする。（かく・つくる）
・ 制作途中の作品から、課題を見つけ取り組むことができ、作家作品や仲間の作品に対し価値を見つけだせるようにする。（みる・かんじる）

4　題材の流れ（本時　5／10）

生徒の活動の様子		教師のかかわり・指導のポイント
1　テーマの構想 箇条書きで書き出した言葉を自分の思いの強いものに絞り、そこから具体的に感じ取ることをまとめてテーマをつくる。	毎時の子どもの気持ちや取り組みを振り返るポートフォリオの取り組み	1ワークシートを使い、それぞれの興味関心や気になることなどをまとめ、具体化させ、自らの形につながるテーマづくりを行う。
2　石膏ブロック制作 石膏の特性を知り、丈夫な石膏作りを行っていく		2石膏と水の割合などを理解し、失敗せず、丈夫な石膏を作ることを心がけさせ、自分の素材を作れるよう指導していく。
3　エスキースづくり		3油粘土を利用してエスキースをつくる。抽象的な形態を理解させ、一つ一つの形に自分の意味づけをしながら制作できるよう指導する。
4　展開図		4エスキースをもとに、6面から見た展開図を描いていけるように指導していく。ビデオカメラなどを用いて指導する。
5　彫り		
本時　彫る面を決め、道具を安全に使い、荒彫りをする。		5彫る順番を確認でき、始めの彫りを理解しながら制作することができる。
○本彫り　それぞれの面からの形を彫り進め、大まかな形をつけていく		○どのように道具を扱えば良いか彫りやすくなるかを、制作を通して気づき彫り進められるように指導していく
○細部　鉄ヤスリや紙ヤスリを使って形を整えていく		○自分の思いの形に近づいていけるよう、
6　まとめ		6自分の作品の振り返りと、仲間の作品の良さについて見つけ交流をすることができる。

提言「かく・つくる」　　中学校２年　釧路町立富原中学校

『ドライポイント』～超現実的な世界（シュルレアリスムの世界）～

提言者・木田　るみ子

１　はじめに

美術に対する意識を調べるアンケートの結果「美術を頑張りたい」と思っている生徒が多くいる。実際に「絵を上手くなりたい」と答える生徒も多く、休み時間や放課後は質問に来る生徒や我慢しきれず「先に始めていいですか」と聞き黙々と授業開始まで作業を進める生徒もいる。そんな中、今回提言するドライポイントは版画作品の製作と、作品のアイディアを考え描くことに苦手意識を持つ生徒が多くいることから導入に至った題材の一つであり、より生徒が楽しく発想し自分オリジナルの世界を創り出すことを期待したものである。

２　題材について

本題材は、アイディアを膨らませるためにシュルレアリスムの手法の一つデペイズマンを利用した。もう一つは、線や点で光・明暗・質感・量感の表現がしっかりと表現できるドライポイントを導入した。ドライポイントの良さを考えたときに「線のにじみ具合が独特である」という技法的な点が今回の題材の特徴となった。また、透明な塩ビ版を使うことで下絵を直接的に写し取ることができ「下書きは上手く描けたが彫りは失敗する」という先入観をできるだけ無くすことができる。そして、木版画の直接手で刷る手段ではなくプレス機を使った刷りという間接的な段階を経て、刷り上った作品を見る子どもたちの反応を見ることができると考えた。

３．題材目標

（１）デペイズマンを使い自分の中でイメージを転換できるように意識を向けることができる。

（２）ワークシートに沿って作品を制作する課程を経験的に体験しそのやり方を前向きに学ぶことができる。

（３）ドライポイントの特性を知り自分の技術を生かしながら制作することができる。

（４）自分と他者の作品を見て鑑賞することができる。

４　題材の流れ（８時間扱い）

１．　シュルレアリスムについて理解しアイディアを膨らませる。

２．　線の表現を理解させ下書きを描かせる。

３．　表現方法にあった道具を使い彫らせる。

４．　凹版画の原理について理解し作品を完成させる。

５　活動を終えて

線描のみで、明暗や立体感を表現できることを理解させ下書きを描かせることで、彫りの段階でどのように彫ればいいかが明確になり作業がしやすいようだった。また、デペイズマンを活用することで考えることに苦手意識を持つ生徒にも取り組みやすく、自分の下書きに不安を持っていた生徒も他者の作品を見て、自分の作品に対し「さらに面白く複雑に」と考え、アイディアを深めることができ完成までの間に作品を「つくる」ということに対する姿勢の変化を見ることができた。また、今までに経験のしたことのない表現媒体ということもあり、透明の版に引掻いて白い線ができていくという作業がどの生徒にとっても楽しかったようで、授業の説明を始めると「早く彫らせて！」という声が上がるほどだった。版画に対する苦手意識を和らげ、集中し作品に取り掛かるきっかけとなった。

提言「かく・つくる」

『絵本の制作』

釧路東高等学校　３年（選択）

提言者・上野　秀実

現在の学習指導要領への改訂を受け芸術の必修単位は「３単位を下回らないこと」から「２単位を下回らないこと」となりました。加えて週五日制への移行、情報や総合的な学習の時間の導入が高校における教科としての美術の存在を大きく減退させることにつながりました。これまで１年、２年時に履修できたものが１年時の美術Ⅰだけで終わる場合が一気に増加した結果、持ち時数が減った美術の専任教員が現場から消えて行きました。更に少子化が学級減や学校の統廃合を加速させたことから教科としての美術がカリキュラムから姿を消してゆきました。そのような状況下で釧路東高校は芸術教科をカリキュラムにしっかりと位置づけてきた歴史があります。改訂前の学習指導要領での教育課程では１年から３年まで最大６単位の芸術科目の履修が可能でした。現在は１，２年生で４単位を必修とし、３年生では選択教科のひとつとして芸術以外の教科との選択となっていますが多くの生徒が３年生でも芸術を選択しています。しかし、他教科との選択という都合から１時間ずつ週２回の実施という授業形態はこれまで２時間連続で行ってきた教材のあり方に見直しを迫るものとなりました。絵具などの準備と後片付けに時間が取られると作品に向き合う時間が不足してしまうからです。今回提言する絵本の制作はそんな事情から導入に至った教材のひとつです。ページ単位で制作できること、描画材料を限定せず生徒各自が自分の表現したいものにあわせて選択できるように自由度を持たせたことなどで１時間単位の細切れの授業にも対応できるようになりました。そしてこの絵本の制作は今年度で３年目の取り組みとして生徒にも認識が深まってきました。

この教材にはいくつかのねらいがあります。まず物語を自分でつくりだすこと。次に物語の場面にふさわしい効果を考えたレイアウトや絵を描くこと。そして、製本及び装丁まで一貫して材料の状態から作品を完成させることです。

最初のねらいである「物語づくり」では多くの生徒がオリジナルなものを志しますが、意外とそのハードルは高く、どこかで聞いたような安易なストーリーに逃げ込む者も少なくはありません。また産みの苦しみから抜け出せなく遅々として制作が進まなくなる生徒もいます。この対策として私は歌の歌詞をストーリーにすることを提案しています。子どもたちが普段耳にする音楽は自ずと関心の高い歌を選んでいます。思いを寄せる歌の歌詞は既に文章表現として物語性を持っており生徒のイマジネーションをかき立てるに十分な素材です。

絵本という表現媒体はページを括ってゆくことで時間や空間を移動させられ通常の絵画制作では表現できないものです。ページをめくると場面が転換される面白さをどのように作品化してゆくかは正に２年生まで養ってきた美術的な能力の発揮のしどころです。そして描画には各自が表現に適したものを選択し生かされます。ポスターカラー、カラーインク、色鉛筆、コラージュからデジカメで撮影された写真まで登場しました。

作品の制作では完成に至る過程で、できる限り素材の状態から取り組むように心がけてきました。時間はかかるものの教材として購入することができる絵本のキット教材と作品としての価値を高めるポイントはここだと考えています。生徒は作品にかける手間が多いほど自身の作品を大切にしてくれます。ページとなる中身は画用紙を一枚ずつの貼り合わせたもの、厚ボール紙と色画用紙でつくる表紙はその色選びも重要です。製本が終わった作品を大事そうに開く生徒の姿は端的に手作りの大切さを教えてくれます。

美術を選択した３年生にとっては卒業制作とも言える絵本。最近ではこれを見た下級生達は「早く自分たちも絵本がつくりたい」「先輩達の作品はすごい」とモチベーションを高め、他者を認めるようになりました。思いを込め時間をかけてつくられた作品は作者自身の心を豊かにするだけではなくそれに触れた者へも影響を少なからず与えるのだと知らされます。

かんがえる・くふうする

9:00　　10:20

小学校4年

「コロコロコロガラート」(80 分)

授業者　佐藤　円

《2F　東側学年棟》

9:30　　10:30

小学校6年

「ものくろあーと」(60 分)

授業者　亀岡　朗子

《2F　西側学年棟》

9:00　　9:50

中学校1年

「イメージの箱」(50 分)

授業者　免田　まゆみ

《3F　西側学年棟》

基調提案

かんがえる ・ くふうする

題材という条件の中で

図画工作科・美術科では、「○○をつかって…」「○○をテーマに」「○○の場所で」など活動の最初の段階で題材という条件が与えられる場合が多い。

子ども達は、題材に合わせて自分の思いや願いをふくらませて表現したり、今まで表現したかったものを表し方の引き出しの中から取り出して表したりする。

この表現活動の中で子ども達は、どうやって表そうかと**「かんがえる」**。そして、素材や表現方法を選び、実際に活動しながら、よりよい表現のために**「くふうする」**。

発想構想の能力

これは、図画工作科では「発想構想の能力」といわれ、立体作品などををつくる場合は、活動の前段階の構想図などで、絵画などの平面作品をつくる場合は構図などの画面構成で評価される場合が多い。

しかし、子どもの内面では**「かんがえる・くふうする」**は活動の最初から最後まで連続して行われている。

日常生活では

子ども達は日常生活の中で、ひと・もの・ことと出会い、交流することで感動をおぼえたり、知識を得たりする。例えば友達との交流が多い子は、たくさんの友達を理解し仲良く行動することができるし、スポーツに一生懸命取り組んでいる子は、新しい技術や戦法に出会ったときも自分なりに対処し、自分のものとしていくことができる。このような経験や知識を積み重ねが日常生活において**「かんがえる・くふうする」**基礎となるのではないだろうか。

図工・美術の活動の中では

図画工作科や美術科において、その基礎となるものは、日常生活と同様、学習活動の中で習得することができる知識や素材や技法の経験だといえるだろう。つまり、一つの題材の中で、明確な習得すべき造形的な知識や技能が、提示され、それを活動の中で十分に経験した時、子ども達は自分の力とすることができる。

そして、他の題材の中で、それ以前の題材で得た造形的な知識や技能を活用することができた時、自分の力として定着し、意識される。この繰り返しが、子どもの中に造形的な経験や知識などを積み重ねた表し方の引き出しを増やしていくことなる。その引き出しの数が多ければ多いほど、子ども達の中での**「かんがえる・くふうする」**幅は大きくなる。

何をつくっていいかわからない！

しかし、学習の最初の段階から「何をつくっていいかわからない。」「何も思い浮かばない。」という子どもをよく目にする。釧路管内の先生方からも同じような子ども達の様子に悩んでいるという声を耳にすることが多い。

では、このような子ども達に**「かんがえる・くふうする」**力は備わっていないのだろうか。

ある題材で

上記のような児童に対し、ある題材で担任は学習のはじめに、いくつかの作品例を紹介した。すると、その児童は「自分もこんな風につくりたい」と目を輝かせ、「これ○○に見える。」「これを使いたい」と積極的に素材集めを始めた。そして、色々なアイディアを出しながら楽しくつくることができたのである。

かんがえる

これは、具体的な作品例を見た児童が、自分の経験の中から**自分ができそうなもの**として認識し、素材集めの段階で**自分が使えそうなもの・使ってみたいもの**を選び、**自分がつくりたいもの**を**「かんがえる」ことができた**姿である。

つまり、この児童は、作品例の中に**表し方の引き出しの中から出せる造形的な知識や技能**を見つけることができ、安心して表せることに気づいたのだ。

くふうする

そして、この児童は、色々な道具を使用したり、色々なものと組み合わせるなど**「くふう」**しながら**自分がつくりたいもの**を楽しく表現することができた。さらに、この活動の中で担任が紹介した新たな道具や技法にも積極的に挑戦し、自分の活動にも生かすことができたのである。

習得と活用

この例では、担任が作品例を紹介することによって児童の引き出しを確認させ、それをきっかけに**「かんがえる・くふうする」**力を発揮させることに成功した。しかし、この児童が図画工作科の活動の中で、段階的に明確な知識や技能を習得し、それを活用する経験を続けてきたのであれば、「何をつくっていいかわからない。」「何も思い浮かばない。」という声を上げることは無かったのではないだろうか。

くしろスタイル

「くしろスタイル」は、小学校１年生から中学校３年生までの９年間の各学年や各題材で習得すべき造形的な技能や知識を意識した構成になっている。これは、子ども達が段階的に習得したものを、活用しながら自分のものとしていく中で、**「かんがえる・くふうする」**行為を自然に繰り返し行うことができるようにと考えたからである。

さらに教師は**「くしろスタイル」**を使用した学習を行う中で、子ども達の**「かんがえる・くふうする」**姿を把握し、効果的な支援を行っていくことが必要になってくる。

評価規準と支援

活動の最初から最後まで、子どもの中で繰り返し行われている**「かんがえる・くふうする」**姿を把握するために、教師は、**「くしろスタイル」**にあるような明確な目標と評価規準を持ち、常に子どもに寄りそい、観察し、ともに考え、手を動かし、つぶやきを聞いていくことが重要である。

ポートフォリオ

しかし、学級の子ども達全てに毎時間それを行うのは不可能である。そこで、ワークシートを用いたポートフォリオや活動や作品の経過写真を記録しておくことが、子ども達を理解するための道しるべとなってくる。

「かんがえる・くふうする」の力を伸ばしていくことは一度にできることではないが、教師が明確な考えを持って題材を構築し、子ども達が活動の中で自分の力を活用し「つくる喜び」と「感動する心」を持つことのできるを経験を積み重ねていくことで可能になると考えている。

指導案【かんがえる・くふうする】　　釧路市立芦野小学校　４年生　３５名

「コロコロコロガラート」

指導者　佐藤　円

１　子どもの実態（大会テーマとの関連から）

本学級の児童は、どの授業にも意欲的に取り組み、発言も積極的である。友達と遊ぶことが大好きで、休み時間はみんなで仲良く活動している姿が見られる。また、好奇心が旺盛で新しいことにも抵抗なく取り組んでいる。

図工に関しては、係の仕事でオリジナルキャラコンテストを開いたり、はさみを使って様々な模様をつくり、教室に掲示するなど、普段の生活の中から図工に親しむ様子が見られる。また、他の教科でもポスターや新聞にまとめる活動などを楽しく行っている。

図工に関するアンケートを行った結果、35 人中 28 人が「図工が好き！」と答え、関心の高さがうかがえる。図工の中でも、特に工作が好きで、自分たちのつくりたいものを夢中になってつくっている。また作品をつくるために必要な材料も自分たちで準備し、どんなものができるのか想像することも楽しんでいる。

また、鑑賞も作品が完成した後、毎回行い、友達の作品のよいところや工夫しているところを認め合ったりしている。

しかし、つくりたいもののイメージはあるもののどのようにつくったらよいか戸惑ったり、技能が備わっていないため、失敗してやる気を失ってしまう児童も見られた。たとえば、「風パワー全開」の題材で「ウインドカー」をつくったときは、タイヤがまわらず、あきらめそうになる児童も見られ、技能的なヒントや支援が必要だった。

「できた」という自己実現の喜びを感じるためには、技能面も重要である。そのため、楽しみながら技能を育てられるように、カッターナイフの練習のために紙飛行機をつくったり、ペーパークラフトの作品づくりなどを日常的に行なってきた。

今回は、本題材により、子ども達に「できた！」という喜び、「つくる」喜びを感じて欲しいと考える。

２　題材について

本題材は、ビー玉が転がり落ちる面白い仕組みを「かんがえ」ながらつくることが求められる。レールをつくるためにはカッターナイフを使う必要があり、つくったレールはボンドやのりなどで接着しなければならない。迷路をつくる活動を通して、カッターナイフの使い方と接着剤の「くふう」した接着の仕方を習得させたい。

また、楽しい迷路をつくるために自分だけの仕掛けをつくり、友達と交流するという目標を持たせることによって、「かんがえ・くふう」することができると考える。十字路、Ｔ字路、筒、急斜面、２階建てや落とし穴など仕掛けの「くふう」が考えられる。さらに迷路を飾り付けるなどの工夫も予想される。

本題材は、「できた！」という喜びを感じ、「いいね！」と共感しあう喜びを感じるうえで大変有効な題材であり、つくる喜び・感動する心につなげていけるのではないかと考えた。

3　題材の目標

・　ビー玉が転がり落ちる楽しい迷路をつくることに興味をもつ。
（造形への意欲、関心、態度）

・　ビー玉が転がり落ちる仕組みを理解し、どのようにしたら楽しい転がり方をするかを考え、工夫してつくる。（かんがえる・くふうする）

・　カッターナイフと接着剤の正しい使い方を知り、迷路をつくることができる。
（かく・つくる）

・　作品を交換して遊び、作品の特徴や工夫した点を確かめ、認め合う。
（みる・かんじる）

4　題材の流れ（本時　5、6／8）

	児童・生徒の活動の様子	○教師のかかわり　◎評価規準
1 2	○カッターナイフの正しい使い方を知る ・えんぴつのように持ち、刃を一目盛りだけ出して切る ・自分の奥から手前の方へ切る ・横やななめに切るときは、紙を動かして切る ・刃の進行方向には手を置かない ・カッターの背を使って、紙に折り目をつける ○接着剤の使い方、固定の仕方を知る ・洗濯バサミや輪ゴムで固定する ・のりしろのふちにボンドをつけるようにする ○切り抜いたものを組み合わせるとレールになることに気付く	○　カッターナイフと接着剤の使用について図で示して支援する ○　カッターナイフの使い方や注意事項を確認する ◎箱やレールの作り方を知り、カッターナイフや接着剤を適切にしようしてつくる （かく・つくる）
3 4	○前時につくったレールを基に、楽しい迷路をワークシートにデザインする ○自分だけの楽しい仕掛けを考える （十字路、T字路、筒、急斜面、2 階建てや落とし穴）	○　レールや箱など、実際に使用する物を準備し、具体的にデザインを考えられるようにする
5 6 本 時	○デザインをもとに迷路をつくる ○レールの接着方法を考える ・接着の工夫する ・迷路にどんな色や飾りつけをするか考える	○　レールの接続方法や接着の工夫など、ヒントコーナーを設ける ◎どのように転がると楽しいかを　　考え、立てた計画を生かしてつくる （かんがえる・くふうする）
7 8	○友だちと作品を交換して遊ぶ ・面白い仕掛けや工夫しているところを認め合う ・鑑賞カードに記入する	○　友だちの面白い仕掛けや工夫しているところに目を向けるように促す

指導案【かんがえる・くふうする】

北海道教育大学附属釧路小学校　第６学年２組　３７名

「　ものくろあーと　～水墨画に挑戦！～　」

指導者　　亀岡　朗子

１　子どもの実態

当学級は第５学年からの持ち上がり学級であるが、図工が大好きで教室全体が児童の工作や絵で溢れている。図工の時間のみならず、休み時間も「ものづくり」「お絵描き」をして過ごす児童が多い。また、かく・つくる行為を自分の思いや考えを表現する手段として定着させている児童が多く、各教科や総合的な学習の時間、学級活動などで調べ学習の発表を行う際、自主的に絵を描いたり、模型をつくる姿が見られる。

しかし、作品にリアリティを求める傾向が全体的に強く、「参考になるものがなければ描けない」という児童が多い。それは同時に、「想像上の○○を描きましょう！」との投げかけに対し「想像できない…」「アイディアが浮かばない…」といった実態にも反映している。また、細部への「こだわり」を長い時間継続させる児童が多い。例えば「絵で表す」題材では、一箇所の表現に固執しすぎるあまり全体を時間内に仕上げることができず、最終的には満足ができない自己評価に至ってしまうことも児童も少なくない。

思春期における美意識の高まりとともに、様々な技法の習得や表し方の工夫による「できた！」という達成感と、それらの作品に対する「何か、いい！」という感覚を味わえる体験を増やし、一人一人の児童の「美」そのものに対する認識を広げられる活動を展開していくことが、「できた！」「いいね！」が息づく時間を求める、本大会のテーマにせまることにつながると考えている。

２　題材について

本題材は、第６学年の社会科で学んでいる歴史学習に関連づけて設定したものである。墨を使った表現は古く、天平文化における描線を重視した白描画に始まり、雪舟が名高い室町文化では美しい濃淡を特徴とする山水画、ダイナミックな襖絵、屏風絵へと様々に展開してきた。現代では昔からの技法を重んじるだけでなく、墨のにじみによる偶然性を生かしたり、マンガやポップアートの手法としても取り入れられるようになった。

導入では、同時進行している歴史学習に合わせた水墨画を鑑賞するとともに、作品にも使われている古くからの技法（被法・点葉法・夾葉法）や、指頭画・墨流し、白抜き、にじみといった墨の特徴を生かしたり、墨の感覚を楽しめる技法を数多く試せる場を保障していく。そして展開では、墨を使って表現することに慣れ、技法のひきだしが増えたタイミングで、技法を生かすための画面の構成、こだわりをもったモチーフの選定などを「かんがえ」たり、「くふう」しながら、その効果を確かめながら描いたり、よさや美しさを感じ取りながら世界に一つだけの「ものくろあーと」を完成させられるようにする。

また、本題材は児童が日頃から自己・他者評価しているであろう絵の「上手」「下手」に関係なく描くことそのものを楽しめる題材であると考える。そこで、３７人３７様の「できた！」と「いいね！」につなげていく授業を展開していくためにも、児童一人一人の日頃の活動を見取った上で、興味を示しそうな表現活動を吟味しながら提示することを手立てとしなければいけないと考える。みたものをみたままに表現されたものばかりが「いい作品」なのではなく、濃淡が織りなす雰囲気であったり、力強さ、素材の特徴を生かした工夫なども含めた上で「いいね！」と価値付けられるようにしていきたい。

3　題材の目標

（日本のアート）

・　水墨画や浮世絵など日本の伝統的な美術作品に関心を持つ態度を育てる。

（造形への意欲、関心、態度）

・　日本の伝統的な作品の美しさや素晴らしさを知り、自分の表現に生かそうとする姿勢を育てる

（みる・かんじる）

（ものくろあーと）

・　墨によるいろいろな表し方に関心を持ち、墨で描く快さを楽しめるようにする。

（造形への意欲、関心、態度）

・　画面の組み立て方や配色を考えたり、試みようとすることができるようにする

（かんがえる・くふうする）

・　墨や筆の使い方の効果を確かめながら描くことができるようにする　（かく・つくる）

・　自分や友だちの作品をみて、よさや美しさを感じ取ることができるようにする

（みる・かんじる）

4　題材の流れ（本時　3／5）

児童・生徒の活動の様子	教師のかかわり・指導のポイント
○図工や社会の教科書の図版を鑑賞し、日本のアートの昔と今とのつながりについて、気付いたことを発表する。 ●絵の具セットにはない色を使って描いているね。 ●鮮やかじゃないけど、味があるよね。 ●かすれてる、ってことは、二度がきをしていないのかなあ？	○社会科で既習している雪舟の水墨画など、歴史学習に関連付けながら作品を提示する。
筆をつかって、いろいろ試してみよう	
○様々な太さや種類の筆を手にし、やってみたい技法を見つけて実際に試してみる。	○面相筆やはけなど、様々な太さや種類の筆を準備し、どの筆を使って、どのような技法で描かれたものなのかがわかるような作例を提示する。 ○児童の「やってみたい」気持ちを喚起できるような作例を工夫する。
もうくら「あーてぃすと」になろう！	
○和紙独特の感覚を味わう ○前時に試した技法を生かしながら、１つの技法にこだわってみたり、様々な技法を組み合わせてみたりしながら、画面を構成する。	○前時の活動で試した技法がいつでもみれるようにポートフォリオ化したワークシートの活用を促し、個に応じて支援する。 ○児童がより完成度を味わえるように、事前に作った自分の「印」を押せるように準
もうくらあーと 鑑賞会をしよう！	
○友だちの作品の、技法の工夫や表現のよさや美しさに気付き、互いに交流しながら認め合う。	○完成作品を掛け軸風の台紙に貼るなど、掲示にも日本的な要素を盛り込み、味わい深く鑑賞できるような場の設定を工夫する。

指導案【かんがえる・くふうする】　　釧路市立鳥取西中学校　１学年３組　３７名

「イメージの箱　（表現）」

形のないものに色や形を与えよう

指導者　　教諭　　免田まゆみ

１　生徒観

生徒達は今まで、幼稚園、小学校や家庭生活においての様々な造形活動を通じて、多くの美的体験を重ねており、その中では「やった」「できた」といった成功体験とともに、一生懸命取り組んでも「思い通りに作れない」といった体験もしてきている。

発達の段階で生じるそういった悩みや不安は、「できた」の成功体験から生じる自己実現感と、自己と他者の作品や造形活動の共有の中で生まれる自己及び他者の良さの認め合いの中で解消できると考える。そして自分にとってより高次な目標を立て、その目標を自分なりに追究していくことで、生徒一人一人の自主性が高まると考えている。

本校の生徒の実態として、細かい作業では集中して取り組み高い技能を発揮できる反面、自由な発想を求められる場面では戸惑うことも多い。美術科における４観点の中では、特に「かんがえる・くふうする」力の不足が実態であり、その力を高めるため、題材配列や題材内容を吟味している。

中学校に入学したばかりの生徒は、「芸術」や「アート」といった抽象的な概念にも興味を持ち始めており、本題材で、「造形的に美しいもの」を、色彩や形、素材感を統合的にとらえ立体的に制作する過程の中で、自分の目標を新たにしながら「かんがえる・くふうする」力を育成することができ、さらに、美術活動の楽しさや喜びを味わえる場になると考える。

２　題材について

この活動は、①箱の基底材となるＰＰウレタンボードを発泡スチロールカッターで裁断する。②一文字から発想を広げて、プラスチック版にレタリングを施して彩色し、ボックスの中身とする。③箱や他のプラスチック板の配色と、後に付け足す部品の形の工夫をしてつくる。④彩色されたプラスチック板をＰＰウレタンボードの箱にテグスで吊り下げ完成させる。という内容である。

中に吊り下げられるプラスチック板は透明な為、レイヤー化しており、配色の工夫が容易になるので、画用紙１枚に描き進めるよりも生徒にとっては工夫を重ねやすい。ウレタンボードの箱でも、基底となる箱に容易に他の部品を切り抜いて付け足すことができるので、途中経過の自他の作品を「みる」ことから「かんじ」て、発想・構想の工夫や変更や付け足しをしていくことができ、より自分の思い通りの作品に近づけることができると考えた。平面のみの作品よりも立体化した本題材により、生徒にとってはより発想を広げやすい題材とすることができると考える。

このように本題材では楽しみながらも「かんがえる・くふうする」能力を高め、ひいては「できた！」「いいね！」の喜びの体験から感動を得て自己実現感を味わい、美術を愛好するきっかけとなるようにしたい。「思い通りにつくれる」を、本題材では柔軟に発想しながら表現する楽しさを味わうことで、それぞれが「自分の目標を明確化し達成していくこと」と捉え、その個人目標を一人一人が達成していく過程で自主性を育てていけると考えている。

3　題材の目標

・つくる喜びを味わいながら、意欲的に制作活動に取り組めるようにする。
（美術への関心・意欲・態度）

・文字の意味性や造形的な美しさから、配色や立体構成のイメージを広げることができるようにする。（かんがえる・くふうする）

・形や色彩、材料がもたらす性質や感情を理解し、イメージに合った色や形を用いて、必要な用具を選択し、独創的な表現ができるようにする。（かく・つくる）

・自分や友達の作品の良さを味わい、作者の意図や表現の工夫などを感じ取ることができるようにする。（みる・かんじる）

4　題材の流れ

題材名		「イメージの箱」	
時数	時間	生徒の活動の様子	教師のかかわり・指導のポイント
1	1	オリエンテーション 「季節を感じて」　鑑賞～教科書の作品を見て物語づくり ・四季を表す４枚の写真から発想して物語を文章と絵で表す。	生徒が教科書作品の美しさを味わいながら、興味を関心を高められるように発問する。
2	1	「発想をひろげよう」～形のないものを有形化し、イメージを表現する。 ・作品例を見ながら作品の特徴をつかみ、表現したいイメージを、有形無形にこだわらず発想して描く。	形のないものにイメージを付加して形にして表現する楽しさを実感できるようにする。
3	1	・「字体の色々」～明朝体とゴシック体の特徴 ・自分の好きなイメージの１字を選んでの作品構想 ・明朝体とゴシック体の特徴を理解し、文字の美しさを味わって、本題材の内容をとらえて字を選び、アイデアスケッチに入る。	レタリング字典を用いて各字体の特徴や美しさをとらえさせ、「イメージの箱」の作品の構想を立てられるようにする。
4	1	・「色の秘密」～色彩学の基礎　知識理解 ・色彩学の基本的ないくつかの用語の意味を理解して色の成り立ちやしくみがわかり、「配色」は「色相環の角度」と「トーン」とによって考えていくことが理解できる。	色彩についての基礎的な知識を、生徒の実技体験を通して身に付けられるようにする。
5 6	2	・配色計画を立て文字プラスチック板と文様プラスチック板を彩色する。 ・作品イメージを想像し、色彩学で身に付けた知識を活用して色数～３色の配色を決め、混色をＴ字に沿い、面相筆と平筆を使いこなして、美しく彩色することができる。	レイヤー化しているプラスチック板の特徴を押さえさせ、色彩学を活用して配色を考えさせる。
7	1	・アイデアスケッチに沿って外箱を裁断し、箱部品内側に彩色する。 ・ＰＰウレタンボードをカッターと発泡スチロールのカッターで切り取りボンドで組み立てる。 ・外箱を美しく裁断し、彩色することができる。	アイデアスケッチを発展させたり、工夫を重ねたりさせ、カット作業を進めさせる。
8	1	・箱の組み立て、外側の彩色と部品の貼り付け ・ＰＰウレタンボードを、完成部品をイメージしながら文字との配色バランスを考えて彩色していく。	・工夫できるところを発見し、更に作品を良くしようという意欲が持てるようにする。
9	1	・文字や文様のプラスチック板を、組み立てた箱にテグスを使って設置・組み立て後、プラスされるプラスチック板の構想を立て、カットしたり彩色したりして箱にテグスで設置する。 ・バランスや重心を工夫して箱部品を正確に設置して、美しく仕上げることができる。 ・「もっと良くなるところ」を発見して、プラスするプラスチック板のイメージを構想して、部品をより良くしていくことができる。	・出来上がってきた各部品を向きや傾き位置などを工夫しながら設置することができる。 ・文字や箱との配色バランス、大きさや位置のプラス効果になる部品を制作できるようにする。
10	1	・作品相互鑑賞会 ・友達の作品を積極的に鑑賞して学んで良さや美しさ、努力した所を発見することができる。	・体験や知識を通して具体的に良さや美しさ、努力に気付くことができるようにする。

提言「かんがえる・くふうする」　　小学校　3年　千歳市立千歳小学校
『「魅力的な題材」から「魅力的でかんがえる活動」へ』

提言者・岩　崎　愛　彦

1．はじめに

図工で扱う題材はとても魅力的です。しかし、教師はこの魅力に頼りすぎていないでしょうか。題材を与えてあとは完成を待つだけ？そんな授業は授業ですか？つくり方を教えれば終わりでしょうか？

制作するときの子供たちはとても生き生きしています。作品を楽しむのは子供自身の心や体が動いている（活動している）時なのです。「心で感動し、体で作品とかかわり、深く考える。」この活動を意図的に組織してあげることで、子供たちは授業の中で図画工作科・美術科の題材をとおして成長できると考えます。子供たちが、「いかに題材・作品と出会うか」は最も重要なことです。この方法を誤ると題材の魅力は半減してしまいます。子供たちが題材の魅力を十分に実感できるような手立てを考えていかなければなりません。

2．小・中学校での実践

表現・鑑賞という「領域」にこだわるのは私たち教師だけではないでしょうか。人々は見たいときに見て、描きたいときに描きます。数的に見れば圧倒的に鑑賞者が多いはずです。しかし、好んで作品にふれようという人がそれほどは多くないのも事実です。そのため、授業においてどのような楽しさがあるのか、どれだけの魅力があるのかを意図的に実感できる取組スタイルを増やしていきたいと考えています。単純に感想や工夫したことなどを述べる「発表会」はよく聞きますが、本当に楽しいことでしょうか。言葉による表現を得意としない子供にとっては苦しみなのかもしれません。そこで、作品の魅力を教師の目で、子供の立場にたって考え、準備していく必要があります。

(1) 中学校での実践①「印象派」

右の２枚の作品は「ヴィクトール・ショケの肖像」です。セザンヌ（左）作とルノワール（右）作です。１枚の作品を見て、その特徴を述べようとするのは結構難しいものです。しかし、同じモチーフの作品（印象派では多い）を比較しながら見ると案外違いがハッキリする場合があります。そして、つかんだ作家のイメージを「テレパシー・ゲーム」で伝えることで、学習内容の確認をしました。

(2)中学校での実践②「ゲルニカ」

ピカソと言えば「バラ色の時代」「青の時代」などがあります。有名なゲルニカをそれぞれの時代風にして読み取ってみます。これも比較によって違いを感じることで、作品に込められた思いや事件などについて深く考えることができました。単純な話し合いでも盛り上がりました。

(3)小学校の実践①「見つけてビンゴ」

３年生の題材「きせつのなかで」。自然物や家庭の廃品などを用いて「春」を表そうとしました。できた作品から気づいた事柄（色や形、見たイメージ、表しているものなど）をビンゴカードに記入し、全体でビンゴ大会をしました。２５個の項目を挙げることがとても難しかったですが、積極的に他者や作品とかかわることができました。

(4) 小学校の実践②「なりきり発表会」

木版画の授業後、他の友達の作品について、自分の作品のようにして、よかったことや工夫したことを勝手に考え、作者になりきって発表しました。インタビュータイムもあり、本当の作者が気づいていない点が多く出され、満足することができました。

3．「かんがえる」ことと「くふうする」こと

鑑賞に限らず、常に子供たちは周りを意識しています。作品を中心にして、楽しい活動があり、終わったときには何となく深く考えたような気がする。いくつかの点について指摘し合ったり、自分なりの考えや感想をもったりすることができる。それが、本当に作品にふれ合ったということではないでしょうか。常に作品を見て、分析し、得られた情報を総合して表現に結びつけるという道筋を図工・美術の授業で学んでいるのだと思います。

提言「かんがえる・くふうする」　　中学校３年釧路市立大楽毛中学校

『超現実絵巻』

提言者・森川　沙織

１　生徒観

生徒達は今までの美術の活動の中で、多くの表現方法に触れてきている。その中で、特に写実的な絵画の分野などで苦手意識を持っている生徒も、積極的に自分にしかない価値を創り出し、発見し、表現の楽しさを体験できる活動の場を設定した。

幼稚園や小学校から積み重ねてきた造形活動のまとめとしての中学校３年生の美術への意識付けと、生涯にわたって美術を愛好していくきっかけとしたい。

２　題材について

「独創的な美の追求」を通して、それぞれが創り出す作品の唯美性を楽しみ、認め合う機会としたい。心の表現である超現実的な表現という面と同時に、絵巻物という特殊な表現方法のよさにも触れることにより、日本独自の美術文化も味わえるようにしたい。

絵巻の「時間と空間の表現」と、超現実の世界に息づく「自己の内面の表現」を、様々なひらめきや想像を組み合わせていく。自分にしか表現できないものを創る活動を通して、今までの各自の経験や努力の成果を実感してこれからも美術を積極的に行っていくための基盤となる、「自分の作品への自信」に繋げたい。

３　指導について

絵巻として、「絵の中に『時間』をつくる」。また、作品を「みせる」ことへの意識。それらを心がけながら制作する。超現実の世界についても、制作を始める前に鑑賞を通して触れておく。

構想のヒントとなるものを提示する。

絵巻のヒント

① 横スクロールのゲーム、またはパノラマ映像のようなつくりになっている。(部分的に見ても全体を通して見ても繋がりがある)

② 場面転換をして同じ存在を登場させたいときは、線ではなく絵で区切る。(古来の絵巻では、木や雲、柱など)

超現実のヒント

①○○でできた□□(リンゴでできたピラミッドなど)

②○○＋△△＝？？(蝶＋花＝生物？　動物？)

③好きなもの＋好きなもの(きれいな世界？　)

④嫌いなもの＋嫌いなもの(不気味な世界？　)

⑤好きなもの＋嫌いなもの(新しい発見？　)

◆ 構想をまとめにくい生徒には、以下の順序で具体的なヒントを提示していく。

１、全体のイメージを掴む前に、思いついた部分から絵巻用紙に描き込んでいく。→実在しない動物、不思議な風景など。

２、描き出しに課題を設定し、はじめるきっかけをつくる。(思い出せそうな歴史人物を自分の記憶で描いてみる。部活動や趣味にかかわる、自分の好きなものを描いてみる。など)

３、発想のきっかけとなるような彩色から始める。→好きな色を使い、ドリッピングやスタンピングなどを行い、その形を活かしながら絵にしていく。途切れ途切れでも構わないので、思いつくものを描いていく。

４　活動を終えて

はじめて触れる横に長い用紙に圧倒されながらも、その広さ故に小さな部分の失敗を恐れずに積極的に描き進み、不思議な世界を散策していく、壮大な時間とともに移り変わっていく幻想の世界、といった作品を描く生徒が多かった。

絵が苦手だと言っていた生徒も、作品を見たクラスメートに「おもしろい！」と、言われることにより達成感や喜びを得ることができた。美術に対する苦手意識が少しでも軽減されたことにより、今後の制作活動に以前より意欲的に取り組み、また、他者と作品を認め合い、楽しみ合っていく基礎をつくることができたと考える。

会場案内図

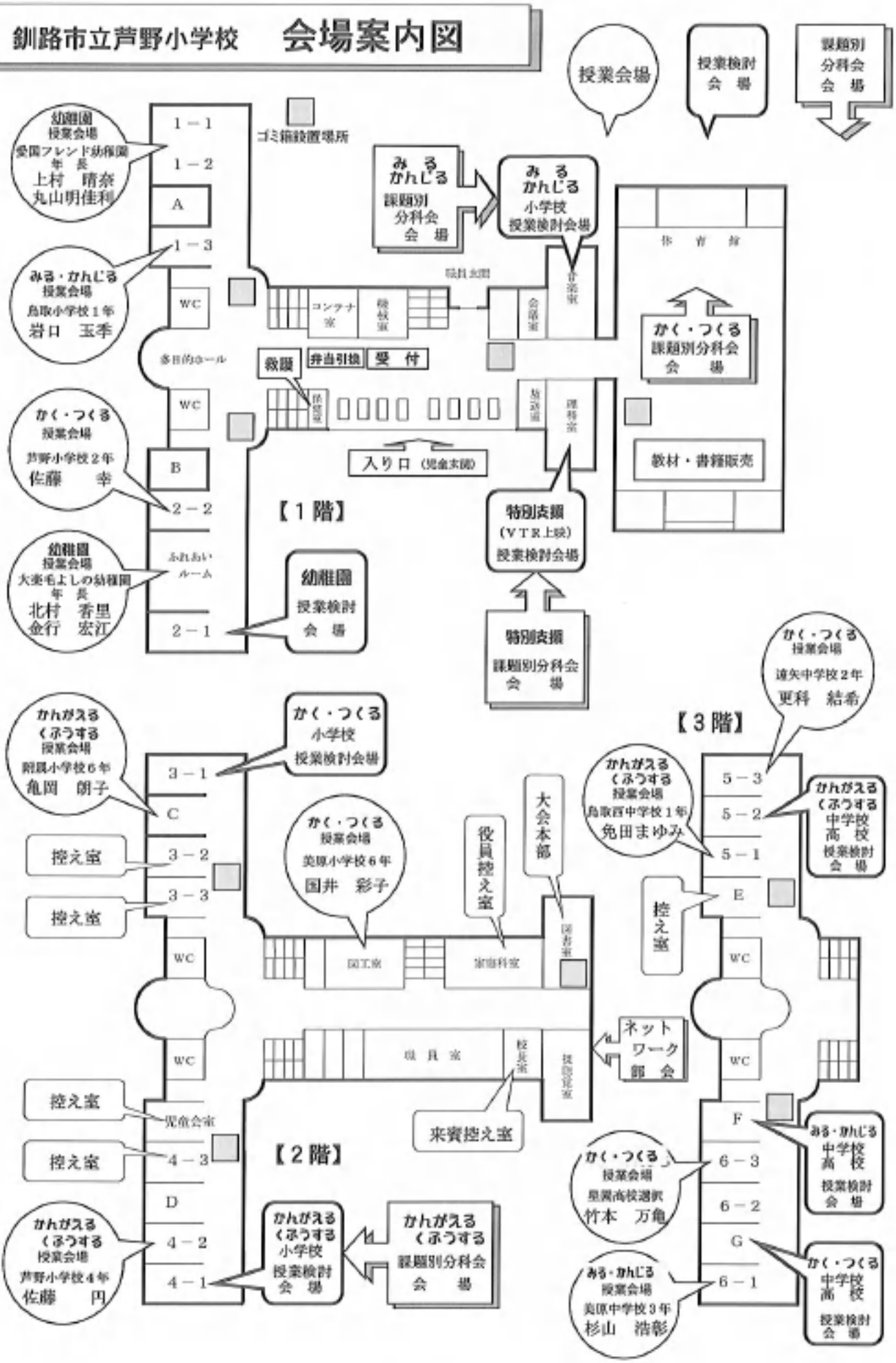
連盟名簿

北海道造形教育連盟規約

大会組織図

連盟大会のあゆみ

釧路市立芦野小学校　会場案内図



平成１９年度　北海道造形教育連盟簿

役　名	氏　　名	勤　務　校	役　名	氏　　名	勤　務　校
委員長	今　裕子	札幌市立澄川西小学校長	庶務部長	箭内　浩之	札幌市立真駒内曙小学校
副委員長			庶務副部長	本間　真理	札幌市立西野小学校
〃道南	武田　誠	函館市立北昭和小学校長	広報部長	松本　和彦	札幌市立発寒小学校
〃道東	宝輪　勝己	釧路市立芦野小学校長	広報副部長	伊藤　聡美	札幌市立苗穂小学校
〃道北	河合　薫	富良野市立鳥沼小学校長	事業活動部長	福島由紀子	札幌市立澄川西小学校
〃道央	桑田　正博	江別市立角山小学校長	事業活動副部長	富樫　信博	札幌市立藤野小学校
〃札幌	塚野　昭臣	北海道教育大学附属札幌中学校副校長	〃	濱口　裕子	札幌市立澄川西小学校
監　査	高橋　潤	釧路北陽高等学校	事業研修部長	向井　正樹	札幌市立あいの里東中学校
〃	墓田　光泰	千歳市立富岡中学校長	事業研修副部長	加藤　雅子	札幌市立屯田西小学校
事務局長	益村　豊	札幌市立菊水小学校長	〃	石川　早苗	札幌市立宮の丘中学校
事務局次長	中居　正光	札幌市立菊水小学校	研究部長	川島　正夫	札幌市立幌南小学校
〃	東　尚典	札幌市立大谷地東小学校	研究副部長	水野　一英	札幌市立宮の森中学校
会計部長	谷山　圭子	札幌市立あいの里西小学校長	顧問(カウンセラー)	植木　則子	札幌市立常磐小学校長
会計次長	高向　修子	藤女子学園中高部	ネットワーク部長	小林　知広	札幌市立前田北小学校

地区委員名簿

地区	サークル名	氏　　名	勤　務　校	電話番号
札幌	札幌市造形教育連盟	菅原　清貴（地区委員長）	札幌市立前田北小学校長	011-684-0123
		稲實　順（地区委員）	札幌市立盤渓小学校長	011-642-3223
道央	石狩美術教育研究会	桑田　正博（地区委員長）	江別市立角山中学校長	011-383-4240
		伝住　修一（地区委員）	北広島市立若葉小学校頭	011-373-5665
	空知美術教育研究会	枝広　健二（地区委員長）	岩見沢市立光陵中学校長	0126-22-0037
		中澤　孝仁（地区委員）	岩見沢市立第二小学校	0126-26-1504
	後志教育研究会図工美術部会	竹生　元（地区長・委員）	余市町立大川小学校	0135-22-3887
道北	上川造形教育研究会	川合　薫（地区長・委員）	富良野市立鳥沼小学校長	0167-22-2903
	旭川市教育研究会図工美術部会	小原　潤（地区委員長）	旭川市立永山南中学校	0166-48-8117
		森　清行（地区委員）	旭川市立光陽中学校	0166-31-9177
	留萌地方美術教育研究会	室谷　雄一（地区委員長）	留萌市立沖見小学校長	0164-43-7814
		斉藤　友昭（地区委員）	増毛町立増毛小学校頭	0164-53-2174
道南	渡島美術教育研究会	藤澤　建二（地区委員長）	北斗市立荻野小学校長	0138-77-8255
		後藤　征秀（地区委員）	知内町立知内中学校	01392-5-5024
	函館市美術教育研究会	瀧本　伸幸（地区長・委員）	函館市立目吉が丘小学校	0138-51-7072
	檜山管内造形教育研究会	田中　俊一（地区委員長）	江差町立江差中学校長	0139-52-0141
		谷口　光伸（地区委員）	上ノ国町立滝沢小学校頭	0139-58-5036
	胆振造形教育研究会	玉田　博（地区長・委員）	鵡川町立武川中央小学校	01454-2-2023

	苫小牧市教育研究会造形研究部会	宮下　肇彰（地区長・委員）	苫小牧市立糸井小学校	0144-72-3812
	室蘭造形教育研究会	北村　哲朗（地区長・委員）	室蘭市立武揚小学校	0143-22-1788
道東	十勝造形サークル	石割　章浩（地区委員長）	浦幌町立浦幌中学校頭	0155-76-6022
		小泉　佳一（地区委員）	幕別町立札内中学校	0155-56-2015
	帯広市教育研究会図工美術部会	根岸　邦晃（地区委員長）	帯広市立第六中学校	0155-23-6168
		入江　映子（地区委員）	帯広市立立川西中学校	0155-59-2014
	釧路造形教育研究会	高橋　潤（地区委員長）	釧路北陽高等学校	0154-41-4401
		中島　健朗（地区委員）	釧路市立鳥取小学校	0154-51-3401
	オホーツク造形教育連盟	光岡　光彦（地区長・委員）	網走市立中央小学校長	0152-44-7368
	根室造形教育連盟	大井誠一郎（地区長・委員）	別海町立上西春別中学校長	0153-87-2006

北海道造形教育連盟顧問

氏　名	地　区	氏　名	地　区	氏　名	地　区	氏　名	地　区
秋山　修世	函館市	金井　秀男	札幌市	角力山　旭	札幌市	三浦　敏勝	函館市
阿部　賢一	北見市	金谷　彊	函館市	諏訪　英雄	登別市	三谷　哲司	札幌市
石井　久	函館市	上条　雄也	旭川市	関　建治	恵庭市	宮川　誠一	札幌市
石塚　潔	登別市	川島　信也	旭川市	高橋　繚治	留萌市	宗廣　義彦	南幌町
伊藤　恵	札幌市	窪田　恵子	札幌市	滝村　虎雄	函館市	村瀬　千樫	札幌市
伊藤　英明	函館市	近藤　貢	函館市	多田　紘一	札幌市	森川　昭夫	札幌市
伊藤　善淋	札幌市	齊藤　隆博	帯広市	田邊　泰夫	旭川市	柳原　寿夫	旭川市
稲船　正男	釧路市	佐藤　潔	釧路市	種市誠次郎	札幌市	山宮　喬也	札幌市
内田　暢一	浦臼町	佐藤吉五郎	札幌市	寺本　吉明	芽室町	吉田　倭雄	札幌市
遠藤　満男	苫小牧市	佐藤　正幸	美唄市	出村　保	留萌市	吉田　英夫	北広島市
江川　佳徳	札幌市	佐藤　靖	札幌市	出村　英和	音更町	米谷　哲夫	札幌市
繪面　和子	函館市	重山　恵	旭川市	冨田　泰	札幌市	和田　弘	北広島市
奥野　郁男	札幌市	床　栄一	札幌市	早弓　弘行	滝川市	若竹　隆邦	江差町
織田　達史	増毛町	芝木　秀昭	札幌市	藤井　正治	札幌市	山口　長伸	別海町
鹿島　健	札幌市	白井　圀毅	江別市	船着　昭弘	札幌市		
加藤　淋	函館市	須貝　徹	遠軽市	松島　輝雄	札幌市		

北海道造形教育連盟事務局

003-0822　札幌市白石区菊水元町２条３丁目２－１４

札幌市立菊水小学校（TEL 011-872-3084　FAX 011-872-4589）

事務局長　　益　村　　豊

HPアドレス　http://hokuzou.kir.jp

平成１９年度地区サークル役員名簿

札幌市造形教育連盟

会長	菅原 清貴	札幌市立前田北小学校長
副会長	田口 和男	札幌市立厚別西小学校長
	土井 善範	札幌市立鴻城小学校長
	寺嶋 文憲	札幌市立東米里小中学校長
	植木 則子	札幌市立常盤小学校長
	富田 賢司	札幌市立丘珠中学校長
	池田 悦子	札幌市立いなずみ幼稚園長
事務局長	稲實 順	札幌市立盤渓小学校長
事務局次長	湯浅 大吾	札幌市立伏見小学校
	八田 博之	札幌市立中央小学校
ネットワーク部長	山 薫	札幌市立上野幌東小学校
庶務部長	藤森 久美	札幌市立前田北小学校
広報部長	小林 充裕	札幌市立厚別東小学校
会計部長	高向 修子	藤女子学園中高部
会計監査	篠原 寛	札幌市立西宮の沢小学校頭
	櫻田 豊	札幌市立手稲鉄北小学校頭

事務局　札幌市立盤渓小学校　稲實　順

064-0945　札幌市中央区盤渓226番地　011-642-3223

石狩造形教育連盟

委員長	桑田 正博	江別市立角山小中学校長
副委員長	藍田 光泰	石狩市立花川北中学校長
	安藤 信行	江別市立第三小学校長
事務局長	伝住 修一	江別市立いずみ野小学校頭
研究部長	山崎 正明	千歳市立北斗中学校
組織部長	萩島 裕二	北広島市立西部小学校
事業部長	西村 司	北広島市立緑陽中学校
広報部長	井上 哲義	石狩市立花川南中学校
監査	住友 俊郎	北広島市立東部小学校長

事務局　江別市立いずみ野小学校　伝住　修一

067-0033　江別市対雁113－1　011-381-5090

後志教育研究会図工美術部会

造形教育窓口　竹生　元　余市町立大川小学校

連絡先　余市町立大川小学校　竹生　元

046-0004　余市町大川町10丁目1　0135-22-3887

空知美術教育研究会

会長	枝広 健二	岩見沢市立緑中学校長
副会長	佐藤 祈	深川市立多度志中学校頭
	鎌田 俊博	滝川市立江陵中学校
事務局長	中澤 孝仁	岩見沢市立第二小学校
事務局次長	竹田 睦生	岩見沢市立岩見沢小学校
会計	岩田 智弘	美唄市立東中学校
総務部長	鎗山 唯郎	赤平市立中央中学校
研究部長	桔梗智恵美	深川市立深川小学校
事業部長	村山 尚子	南幌町立みどり野小学校
広報部長	中澤有米代	岩見沢市立緑中学校
監査	伊藤 晃	岩見沢市立第二小学校
	橋本 幸枝	岩見沢市立明成中学校
	白井万寿子	三笠市立美園小学校頭
顧問	内田 暢一	空美ＯＢ
	佐藤 正幸	空美ＯＢ

事務局　岩見沢市立第二小学校　中澤　孝仁

069-0364 岩見沢市上幌向南３条７　0126-26-1504

上川造形教育研究会

会長	川合 薫	富良野市立鳥沼小学校長
副会長	加藤 隆	比布町立爾留小学校長
	菅原 良和	士別市立温根別小学校頭
	中島 圭介	旭川市立東光中学校
監査	引地 俊夫	上富良野町立東中小学校長
	菅原 敏光	富良野市立東小学校長
事務局長	山口 貴大	当麻町立当麻小学校

事務局　当麻町立当麻小学校　山口　貴大

078-1313　当麻町３条３丁目　0166-84-2020

旭川市教育研究会図工美術部会

部長	川原 潤	旭川市立永山南中学校
副部長	岡田 裕昭	旭川市立永山西小学校
	鈴木 敏春	旭川市立永山南中学校
事務局長	森 洋	旭川市立北星中学校
研究部長	成田 慎司	旭川市立北門中学校
事業部長	畠山 勝	旭川市立神居東中学校
広報部長	中村 靖	旭川市立六合中学校
顧問	林 慶子	旭川市立緑陽中学校長

事務局　旭川市立光陽中学校　森　清行

078-8233　旭川市豊岡３条１丁目　0166-31-9177

留萌地方美術教育研究会

会長	室谷 雄一	留萌市立沖見小学校長
副会長	池田 優子	天塩町立天塩小学校
	斉藤 友昭	増毛町立増毛小学校頭
監査役	滝本 都子	留萌市立東光小学校
	久保なつき	留萌市立潮静小学校
事務局長	野島 操	留萌市立三泊小学校頭
事務局次長	小西 北美	留萌市立沖見小学校
会計	豊崎 東洋	苫前町立古丹別小学校
研究部長	松岡 宏悦	羽幌町立羽幌小学校
事業部長	秋元 咲子	留萌市立港南中学校

事務局 留萌市立三泊小学校 野島 操

077-0001 留萌市三泊町100番地 0164-42-0778

渡島美術教育研究会

会長	藤澤 健二	北斗市立荻野小学校
副会長	黒田 雅世	七飯町立藤城小学校
	竹内 良容	木古内町立木古内小学校
	細川敬太郎	北斗市立石別小学校
	大島 道夫	松前町立松前小学校
	茶碗谷 稔	森町立赤井川小学校
監査	村園 薫英	木古内町立鶴岡小学校
	安達 孝雄	七飯町立七重小学校
研究部長	佐々木善憲	北斗市立浜分小学校
研究副部長	横井 真	木古内町立木古内中学校
事業部長	岡島 俊	鹿部町立鹿部中学校
事業副部長	亀山 厚子	七飯町立大中山中学校
	川村 麻美	北斗市立大野小学校
庶務部長	高島 純	森町立砂原中学校
会計	木村 麻枝	北斗市立浜分中学校
幹事長	後藤 征秀	知内町立知内中学校
副幹事長	水口 司	北斗市立大野中学校

事務局 知内町立知内中学校 後藤 征秀

049-1103 知内町重内22-1 01392-5-5024

函館市美術教育研究会

会長	武田 誠	函館市立北昭和小学校長
副会長	藤川 潔	函館市立千代ヶ岱小学校長
	野呂 憲一	函館市立西小学校長
	辻口 善廣	函館市立戸井西小学校長
	土谷 敬	北海道教育大附属函館中副長
	中村 吉秀	函館市立桔梗中学校頭
	東堂 亮之	函館市立神山小学校頭
事務局長(小)	瀧本 伸幸	函館市立日吉が丘小学校
事務局長(中)	横岸澤英二	函館市立本通中学校
研究部長(小)	西館 純	函館市立昭和小学校
研究部長(中)	木村 伸仁	函館市立銭亀沢中学校
事業部長(小)	山田 光	函館市立あさひ小学校
事業部長(中)	仲井 靖典	函館市立湯川中学校
庶務部長(小)	赤崎 雄二	函館市立昭和小学校
庶務部長(中)	林 弘実	函館市立凌雲中学校
経理部長(小)	山形 弘枝	函館市立金堀小学校
経理部長(中)	齊藤 悦子	函館市立赤川中学校
総務	鈴木 秀明	函館市立神山小学校

事務局 函館市立日吉が丘小学校 瀧本 伸幸

041-0841 函館市日吉町2丁目34-1 0138-51-7072

檜山管内造形教育研究会

会長	田中 俊一	江差町立江差中学校長
副会長	大島 道夫	厚沢部町立館小学校長
	阿部恵津子	上ノ国町立小砂子小学校長
事務局長	谷口 光伸	上ノ国町立滝沢小学校頭
事務局次長	藤谷 貴代	乙部町立乙部小学校
研究部長	太田 哲嗣	今金町立美利河小学校長
事業部長	高橋 栄二	上ノ国町立上ノ国中学校長
幹事	鈴木 修一	奥尻町立青苗小学校頭
	晴山 泰文	厚沢部町立鶴小学校頭
	山谷 佳公	江差町立江差小学校

事務局 上ノ国町立滝沢小学校 谷口 光伸

049-0606 上ノ国町字木ノ子192 0139-58-5036

苫小牧市教育研究会造形教育部会

部会長	宮下 肇彰	苫小牧市立糸井小学校
副部会長	伊藤 寛美	苫小牧市立光洋中学校
	畑瀬 恭子	苫小牧市立拓勇小学校
理事	富山 真裕	苫小牧市立沼ノ端中学校
	石井 浩昭	苫小牧市立美園小学校
幹事長	中村みゆき	苫小牧市立緑小学校

事務局 苫小牧市立緑小学校 中村 みゆき

053-0042 苫小牧市三光町2-6-5 0144-32-6501

胆振造形教育研究会

会　　長　佐藤　輝彦　むかわ町立宮戸小学校長
副　会　長　佐竹　秀行　白老町立竹浦中学校頭
事務局長　玉田　博　むかわ町立鵡川中央小学校
事務局　むかわ町立鵡川中央小学校　玉田　博
054-0022　むかわ町花園１丁目１４　01454-2-2023

室蘭造形教育研究会

地区委員　北村　哲朗　室蘭市立天沢小学校
連絡先　室蘭市立天沢小学校　北村　哲朗
051-0002　室蘭市御前水町2-16-1　0143-22-1988

十勝造形サークル

委員長　石割　幸浩　浦幌町立上浦幌中学校頭
事務局長　小泉　佳一　幕別町立札内中学校
事務局　幕別町立札内中学校　小泉　佳一
089-0553　幕別町札内文京町２９　0155-56-2015

帯広市教育研究会図工美術部会

部　　長　根岸　邦昌　帯広市立第六中学校
副部長　山口　雅子　帯広市立東小学校
事務局長　入江　映子　帯広市立川西中学校
事務局次長　野原　圭介　帯広市立大正小学校
事務局員　石田　千里　帯広市立緑丘小学校
　　小田上飛鳥　帯広市立第二中学校
　　森　好広　帯広市立明和小学校
　　佐々木芳徳　帯広市立第八中学校
事務局　帯広市立川西中学校　入江　映子
089-1182　帯広市川西町西３線60番　0155-59-2030

釧路造形教育研究会

会　　長　宝輪　勝己　釧路市立芦野小学校長
副　会　長　奥田　泰朗　釧路市立共栄小学校頭
　　森川　浩　釧路市立美原小学校頭
　　小野三枝子　釧路市立山花小中学校頭
　　森　富輝　釧路市立大楽毛中学校頭
事務局長　高橋　潤　釧路北陽高等学校
事務局次長　中谷内　遵　釧路市立青陵中学校
　　葛西　新吾　釧路市立桜ヶ丘中学校
研究部長　中島　健朗　釧路市立鳥取小学校
研究副部長　花輪　大輔　北海道教育大附属釧路中学校
事務局　北海道釧路北陽高等学校　高橋　潤
085-0814　釧路市緑ヶ岡１丁目11-8　0154-41-4401

オホーツク造形教育連盟

委員長　光岡　光彦　網走市立中央小学校長
副委員長　神田　国昭　小清水町立小清水小学校長
　　鈴木　峻二　北見市立日吉小学校長
　　吉田　寛　美幌町立福富小学校長
　　石橋　一郎　斜里町立斜里小学校頭
事務局長　里見　貴史　北見市立三輪小学校
事務局次長　平岡　良一　清里町立江南小学校
理　　事　原田　信子　北見市立相内小学校
　　岡本　久美　紋別市立清野中学校
　　大野　忠宏　津別町立津別中学校
監　　査　青木　修　北見市立北中学校長
　　中村　信之　雄武町立豊丘小学校長
研究部長　添田　好美　訓子府町立訓子府小学校
組織部長　江藤あけみ　網走市立第二中学校
広報部長　森崎　好子　網走市立呼人中学校
事務局　北見市立三輪小学校　里見　貴史
090-0836　北見市三輪468　0157-36-2241

根室造形教育連盟

委員長　大井誠一郎　別海町立上西春別中学校長
副委員長　煤賀　克文　根室市立花咲港小学校長
事務局長　小野寺宏二　羅臼町立羅臼小学校長
事務局次長　小出　秀朋　別海町立中西別小学校
研究部長　大溝　雅之　羅臼町立春松中学校
研究副部長　小出　真紀　別海町立光進小学校
会計監査　上原由紀子　標津町立川北中学校
理　　事　長谷川恵美子　根室市立柏陵中学校
　　安井加奈子　別海町立上西春別中学校
　　吉田久美子　中標津町立中標津東小学校
顧　　問　山口　長伸　別海町教育長
　　清水　克美　中標津町　画家
　　桐沢　享　根室市　慟哭の森美術館長
　　細見　浩　中標津町　版画家
　　鍋谷　尊之　岩見沢市　画家
　　木川　勝敏　根室市　写真家
事務局　羅臼町立羅臼小学校　小野寺　宏二
086-1833　羅臼町本町４１　0153-87-2006

北海道造形教育連盟規約

1. 名称と目的

本連盟は，北海道造形教育連盟といい，北海道造形教育の振興を図るをもって目的とする

2. 事　　業

本連盟は，目的を達成するため次の事業を行う

① 研究会・講習会・展覧会等の開催及び後援
② 造形教育に関する教科書・教材・教具等の研究
③ 機関紙の刊行
④ 他の造形教育団体との連絡提携
⑤ その他造形教育振興上必要な事項

3. 会　　員

正 会 員　本道幼・小・中・高・その他これに準ずる学校の教職員
賛助会員　本連盟の目的に賛同するもの

4. 組　　織

サークル　本道各地にサークルを置き，会員は原則としてこれに所属する
本　　部　本連盟の本部は札幌に置く

5. 構成及び任務

① 役　員

委員長	1　名	本連盟を代表する
副委員長	若干名	委員長を補佐する
会計監査	2　名	会計の監査をする

② 委　員

地区委員	地区1名	地区サークルを代表する
常任委員	若干名	本連盟の運営に当たる
顧　　問		連盟の重要な問題につき意見を述べる

6. 選　　任

＊委員長，副委員長，会計監査は委員総会で選出する
＊地区委員は地区サークルで選出する
＊常任委員は委員長の委嘱による
＊顧問は委員総会において委嘱する

7. 任　　期

役員及び委員の任期は1ヵ年とする，但し重任を妨げない

8. 会　　議

＊総　　会　必要に応じ開催し，連盟事業につき協議する
＊委員総会　役員，委員をもって構成し毎年開催する
　　役員の選出，予算，決算及び年度計画等につき審議する
＊常任委員会　役員及び常任委員をもって構成し，連盟の事業を執行する

9. 会　　計

本連盟の会計は，会費・事業収入及び寄付金により執行する
会　費　正会員は一人年額2,000円を納入するものとする
　　サークルは，年額10,000円を納入するものとする

10. 事　務　局

＊事務局は事務局長在勤の学校に置く
＊事務局長は常任委員中より委員長が委嘱する
＊事務局には必要に応じて各部を設け業務を分担する

11. 年　　度

本連盟の事業ならびに会計年度は，5月に始まり翌年4月に終わる

12. 規約の改廃

本規約の改廃は委員総会の議決による

（平成6年4月29日改訂）
（平成9年4月29日改訂）

全道造形教育研究大会開催地と研究一覧

○第1回（札幌）１９５０
情操教育の一環として本道図画工作教育の進展を図るため

○第2回（札幌）１９５２
図画工作教育の新思潮である創造主義美術教育の諸問題について

○第3回（旭川）１９５３
美術教育の指導とは何か

○第4回（函館）１９５４
図画工作教育実践上の諸問題について

○第5回（釧路）１９５５
図画工作教育における学習指導上の問題点の解明

○第6回（札幌）１９５６
造形教育において，つくり出す力を養うにはどうしたらよいか

○第7回（室蘭）１９５７
のぞましい造形教育における具体的諸問題について

○第8回（小樽）１９５８
図画工作学習によって児童生徒の人間性がどのように培われるか

○第9回（帯広）１９５９
新段階における造形教育のあり方

○第10回（網走）１９６０
本道における造形教育の実践を通して今後のあり方を見出そう

○第11回（滝川）１９６１
子供たちの芸術性を育てるために私たちは何を与え何をすべきか

○第12回（名寄）１９６２
子供が生活を見つめて造形的に高まっていくために私たちはどうしたらよいか

○第13回（余市）１９６３
子供が生活を見つめ造形的に高まっていくために私たちはどうしたらよいか

○第14回（札幌）１９６４
子供の創造能力とは何か

○第15回（稚内）１９６５
子供の創造能力とは何か

○第16回（室蘭）１９６６
子供の造形能力とは何か

○第17回（函館）１９６７
指導の構築を具体化する

○第18回（苫小牧）１９６８
指導の構築を具体化する

○第19回（札幌）１９６９
造形能力は，どのような指導によって育てられるか

○第20回（旭川）１９７０
ゆたかに生きる子供の造形能力をどう育てるか

○第21回（札幌）１９７１
造形能力は，どのような指導によって育てられるか

○第22回（帯広）１９７２
未来に生きる子供の造形教育（生活に根ざした造形教育をどう高めるか）

○第23回（室蘭）１９７３
未来に生きる子供の造形教育（豊かな表現力をどのように育てるか）

○第24回（美幌）１９７４
未来に生きる子供の造形教育（ひとりひとりの子供の表現力をどう高めるか）

○第25回（江別）１９７５
未来に生きる子供の造形教育（自ら創り出す力をどう育てるか）

○第26回（岩見沢）１９７６
未来に生きる子供の造形教育（すべての子供に造形のよろこびを）

○第27回（札幌）１９７７
（第３０回造形教育研究大会とかねる）
みずみずしい味でしなやかな子供を育てる造形実践

○第28回（函館）１９７８
みずみずしい味でしなやかな子供を育てる造形実践（すべての子供が生き生きととりくむ学習）

○第29回（旭川）１９７９
生き生きとしたゆとりある子供を育てる図工美術教育のあり方

○第30回（苫小牧）１９８０
ひろがりと深まりのある造形教育を求めて

○第31回（釧路）１９８１
創りだす心をよびおこす造形教育

○第32回（室蘭）１９８２
見る，知る，感ずる，そして創りあげる喜びを

○第33回（留萌）１９８３
生活とふれあい，創る心のひろがりを求める造形活動

○第34回（札幌）１９８４
知恵とエネルギーをわきたたせる造形活動
（わきたつ発想・たしかな表現・つくり出す喜び）

○第35回（函館）１９８５
知恵とエネルギーをわきたたせる造形活動
（心をこめてつくりだす子供を育てる）

○第36回（旭川）１９８６
（第39回全国造形教育研究大会とかねる）
子供の心をゆり動かす造形活動（つくる心のひろがりを求めて）

○第37回（紋別）１９８７
子供の心をゆり動かす造形活動（表現の喜びにひたる子供を育てる）

○第38回（滝川）１９８８
子供の心をゆり動かす造形活動（ひたむきにつくる心を育てる）

○第39回（帯広）１９８９
子供の個性的表現を授ける造形教育の充実
（君はいま創造のとりこに）

○第40回（苫小牧）１９９０
広がり，深まり，そして感動を！

○第41回（札幌）１９９１
子供の個性的表現を授ける造形教育（子供のつくる喜びをひらく）

○第42回（函館）１９９２
子供の個性的表現を授ける造形教育の充実
（感動，そして創造する喜びを）

○第43回（旭川）１９９３
思いをあたため心はずませる創る喜びを

○第44回（釧路）１９９４
心ときめく，創造の喜びを求めて

○第45回（千歳）１９９５
豊かな心と確かな力をはぐくむ造形教育を

○第46回（札幌）１９９６
自らの心を拓く造形活動の在り方
～造形＝感感美遊創　in　札幌～

○第47回（根室）１９９７
感動から発し躍動する力を育む造形学習を！

○第48回（留萌）１９９８
楽しさにひたり伸びやかに表す造形活動と共感し寄り添う指導

○第49回（オホーツク）１９９９
オホーツク発　思・創・喜・感
～一人ひとりが創造的な喜びを実感するために～

○第50回（函館）２０００
20世紀から21世紀へ
～心の風景（ビジョン）の発信を！～
豊かな自分づくりを生かす想創活動

○第51回（札幌）２００１
心豊かに未来に生きる造形教育

○第52回（帯広）２００２
豊かな感性をはぐくむ造形教育

○第53回（滝川）２００３
つくる喜びを実感できる造形教育

○第54回（旭川）２００４
豊かに感じ　おもいをふくらませ
あらわす喜びを

○第55回（函館）２００５
めざめる感性（こころ）
きらめく個性（かたち）
～地域空間がいざなう
造形教育のひろがり～

○第56回（札幌）２００６
楽しさあふれ，確かな表現を実感する造形教育

ネットワーク部会

1．趣旨

北海道の造形教育に携わる人や各地区の連携を深め強化していくために

①各地区が日常的に連絡や交流できるための名簿を年度毎に作成する。

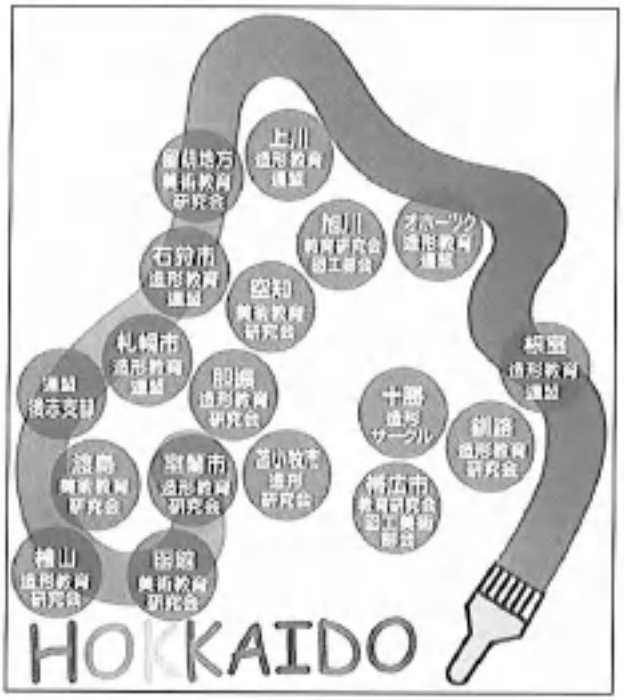
②各地区の研究や実践を交流する。

③北海道共通実践題材の開発を行う。

④北海道造形教育連盟ホームページの内容を充実させる。

⑤５年に１度見直される北海道造形教育連盟の研究主題について，各地区の意見を交流する。

以上の内容を推進するために，春の地区委員総会と夏の全道大会の年２回，ネットワーク会議を開催する。



部長　小林　知広　（札幌市立前田北小学校）
〒006-0820　札幌市手稲区前田１０条１８丁目4-1
ＴＥＬ　　０１１－６８４－０１２３
ＦＡＸ　　０１１－６８４－３４９７
HomePage　http://hokuzou.kir.jp
e-mail　hokuzou.post@kagoya.net

２．組織

全道造形教育ネットワークは，全道１８サークルのネットワーク担当者と本部ネットワーク担当者で組織される。

３．経過

【平成５年　旭川大会】

・全道造形教育ネットワークの設立が承認される。

【平成６年　釧路大会】

・各支部の現状報告や問題点の交流を行う。

【平成７年　千歳大会】

・大会会場で各支部の作品交流を行う。

【平成８年　札幌大会】

・全１８支部の名簿を取りまとめる。地域の特色を生かした実践交流を行う。

【平成９年　根室大会】

・新研究主題の設定や，教育美術展の審査派遣について話し合う。

【平成１０年　留萌大会】

・全国大会に向けて大会主題やキャッチフレーズについて話し合う。

【平成１１年　オホーツク大会】

・全国大会の分科会運営について意見交流を行う。

【平成１２年　函館大会】

・大会での助言や提言の担当者名や内容について各地区の状況を確認する。

【平成１３年　全国大会・北海道大会】

・全国大会の分科会で各地区による助言や提言を運営する。

【平成１４年　帯広・十勝大会】

・今後のネットワーク会議のあり方について意見交流を行う。

【平成１５年　空知・滝川大会】

・「全道の児童・生徒の造形に関わる意欲や技能などの実態調査」の内容や実施についての検討。

【平成１６年　旭川大会】

・「全道の児童・生徒の造形に関わる意欲や技能などの実態調査」の結果について交流する。

【平成１７年　函館大会】

・各地区での取り組みの交流。

【平成１８年　札幌大会】

・各支部での活動報告。HP について

4．２００７釧路大会

夏のネットワーク会議について

①自己紹介

②各サークルの意見交流

・日常の実践交流・課題交流

③各支部で持ち寄った，動画配信用の DATA 交流

・授業で使える素材の構築

④ホームページの今後の運営について

⑤組織改革に伴う，副部長の選出

5．HomePage コンテンツ

造形教育に関する情報を誰もが取り出し，ひとりでも多くの子ども達が，造形活動のよさを感じていけるような環境づくりを目指し，ホームページを運営しています。インターネットでアクセスすると，欲しい情報が蓄積されているようなホームページを最終目標に，今後コンテンツ時の充実を図ってきたいと考えています。

＜コンテンツ＞

○１８支部紹介

○北海道教育美術展

○広報

○リンク

○研究大会（釧路大会）

○授業に使える情報 BOX

など

6．平成１９年度　全道ネットワーク担当者名簿

	サークル名	担当者名	勤務校	TEL	FAX
道央ブロック	札幌市造形教育連盟	山　薫	札幌市立上野幌東小学校	011-893-5055	011-893-3537
	石狩造形教育連盟	山崎　正明	北広島市大曲中学校	011-376-2354	011-377-3419
	空知美術教育研究会	佐藤　祈	深川市多度志中学校	0164-27-2006	0164-27-2036
	後志教育研究会図工美術部会	竹生　元	余市町大川小学校	0135-22-3887	0135-22-7149
道北ブロック	上川造形教育連盟	中島　圭介	旭川市東光中学校	0166-32-1295	0166-32-1296
	旭川教育研究会図工部会	中村　靖	旭川市六合中学校	0166-51-5388	0166-51-5389
	留萌地方美術教育研究会	松岡　宏悦	羽幌町立羽幌小学校	0164-62-1040	0164-62-1104
道南ブロック	渡島美術教育研究会	水口　司	大野町大野中学校	0138-77-8137	0138-77-7974
	函館市美術教育研究会	柿崎　雄二	函館市昭和小学校	0138-41-4964	0138-41-4946
	檜山造形教育研究会	谷口　光伸	上ノ国町立滝沢小学校	0139-58-5036	0139-58-5004
	胆振造形教育研究会	玉田　博	むかわ町立武川中央小学校	01454-2-2023	01454-2-5565
	室蘭市造形教育研究会	北村　哲郎	室蘭市立武揚小学校	0143-22-1788	0143-22-1789
	苫小牧市造形研究会	宮下　肇彰	苫小牧市拓勇小学校	0144-57-2800	0144-57-2830
道東ブロック	帯広市教育研究会図工美術部会	澤田　佳子	帯広市第四中学校	0155-24-3511	0155-24-3512
	釧路造形教育研究会	中島　健朗	釧路市立鳥取小学校	0154-51-3401	0154-51-3402
	オホーツク造形教育連盟	添田　好美	網走市立中央小学校	0152-44-7368	0152-62-0348
	根室造形教育連盟	小野寺宏二	風連町上風連中学校	0153-75-7302	0153-75-7340
北海道造形教育連盟 ネットワーク部長		小林　知広	札幌市立前田北小学校	011-684-0123	011-684-3494

第５７回全道造形教育研究大会釧路大会実行委員会

大会長
今　裕子（札幌市立澄川西小学校長）

大会副委員長
塚野　昭臣（北海道教育大学附属札幌中学校副校長）
武田　誠（函館市立北昭和小学校長）
河合　薫（富良野市立鳥沼小学校長）
桑田　正博（江別市立角山中学校長）

実行委員長
宝輪　勝己（釧路市立芦野小学校長）

副実行委員長
奥田　泰朗（釧路市立共栄小学校教頭）
森　富輝（釧路市立大楽毛中学校教頭）
小野三枝子（釧路市立山花小中学校教頭）
森川　浩（釧路市立美原小学校教頭）
内山　博之（弟子屈町立昭栄小学校教頭）

運営委員会
（実行委員長、副実行委員長、各部長）

大会事務局長
高橋　潤（釧路北陽高等学校）
事務局次長
長谷川成佳（釧路市立景雲中学校）

会計部長
小野三枝子（釧路市立山花小中学校教頭）

《総務部》部　長　葛西　新吾（釧路市立桜が丘中学校）　小池　洋子（釧路市立共栄中学校）
副部長　奥田　泰朗（釧路市立共栄小学校教頭）　西村　真琴（釧路市立春採中学校）
田越　智保（釧路市立鳥取中学校）　松枝　幸子（釧路市立大楽毛小学校）
伊藤　恵理（釧路市立新陽小学校）
《事業部》部　長　中谷内　遵（釧路市立青陵中学校）　大木　敬子（釧路市立青陵中学校）
副部長　森川　浩（釧路市立美原小学校教頭）　小泉　昭子（釧路市立幣舞中学校）
加藤　和江（釧路町立遠矢小学校）　渡辺　哲朗（釧路市立音別小学校）

	阿部　孝彦	（釧路町立富原小学校）	井上けいこ	（浜中町立霧多布小学校）
《編集部》部　長	里見　勝之	（釧路市立昭和小学校）	氏　　絵美	（釧路市立大楽毛小学校）
副部長	森　　富輝	（釧路市立大楽毛中学校）	伊東　義則	（釧路市立愛国小学校）
《研究部》部　長	中島　健朗	（釧路市立鳥取小学校）	幼稚園・小学校部長兼	
副部長	花輪　大輔	（教育大学附属釧路中学校）	中学校・高校部長兼	
【幼稚園の部】	北村　香里	（大楽毛よしの幼稚園）	上村　晴奈	（愛国フレンド幼稚園）
	金行　宏江	（大楽毛よしの幼稚園）	丸山明佳利	（愛国フレンド幼稚園）
【小学校部会】	国井　彩子	（釧路市立美原小学校）	佐藤　　円	（釧路市立芦野小学校）
	亀岡　朗子	（教育大学附属釧路小学校）	佐藤　　幸	（釧路市立芦野小学校）
	日野　道子	（浜中町立貴人小学校）	岩口　玉季	（釧路市立鳥取小学校）
【中学校部会】	更科　結希	（釧路町立遠矢中学校）	森川　沙織	（釧路市立大楽毛中学校）
	免田まゆみ	（釧路市立鳥取西中学校）	木田るみ子	（釧路町立富原中学校）
	杉山　浩彰	（釧路市立美原中学校）		
【高校部会】	上野　秀実	（釧路東高等学校）	高橋　　潤	（釧路北陽高等学校）
	竹本　万亀	（釧路星園高等学校）		
【特別支援部会】	篠木　麻希	（釧路町立富原小学校）	葛西　新吾	（釧路市立桜が丘中学校）
	竹本　千鶴	（釧路養護学校）		
（共同研究者）	佐々木　宰	（教育大学釧路校准教授）		

《会場校職員》　釧路市立芦野小学校

校　　長	宝輪　勝己		市野真貴子
教　　頭	山内　雅恵		佐久間勝教
教　　諭	伊藤　裕子		河原夏奈子
	菅原　博子		相澤　　新
	川島　周子		寺島　理子
	白川　裕史		村重　　文
	中村　玲子		常楽　知輝
	笹本　裕一		三上　　司
	小向美智子		佐藤　　円
	石割真理子		佐藤　　幸
	福原　知子	養護教諭	神治　芳恵
	澤野　連理	事務主任	奈良　吉直
	齊藤　久代	業務主任	畠山　並子
	荒木　裕之	業務主事	阿部　　勝
	佐藤　理子	臨時職員	坂本　　顕
	吉川　千穂		

第57回　全道造形教育研究大会
釧路大会紀要
発　行　者　大会実行委員長　宝輪勝己
大会事務局　釧路北陽高等学校内
高橋　潤
発行年月日　2007年7月26日
印　　刷　（株）藤プリント
釧路市栄町10丁目3番
電話（0154）22-9311